

前津丑ノマヤ遺跡

福岡県筑後市大字前津所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第80集

2007

筑後市教育委員会

まえづうしのまや
前津丑ノマヤ遺跡

2007

筑後市教育委員会

序

当市は国道442号、209号、九州自動車道、JR鹿児島本線など、昔から交通の要所として栄えてきた街であります。

交通の要所としての起源は古代に遡り、律令体制が整う国家形成期の奈良時代に国の重要な施策として整備された「駅路」と呼ばれる都と結ぶ道路が造られた事に依ります。この「駅路」は市を南北に縦断していた事が平成3年の鶴田地区の発掘調査により判明し、羽犬塚地区や山ノ井地区でも相次いで確認されております。

駅路には「駅家」と呼ばれる公的な施設が文献により判明しており、九州に97ヶ所の駅家が造られ、当市内には「葛野駅家」が羽犬塚・前津周辺に存在していた可能性を以前から指摘されてきました。

今回の調査では「葛野駅家」に関連するものと考えられる遺構や遺物が出土しており、その存在を裏付ける重要な手がかりを得ることができました。

調査に際しましては、地権者である築地勇氏には多大なるご協力を頂き、また各関係機関には多大なご支援をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

平成19年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例言

1. 本書は平成17年度に筑後市教育委員会が行った前津丑ノマヤ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第1章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は上村英士が作成し、遺物の実測、浄書は整理委託事業として(財)元興寺文化財研究所 仲文恵 横井理絵 丸山裕見子 猿渡式子が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系(日本測地系)を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による(筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて:2002に準拠している)。
SB-掘立柱建物 SD-溝 SK-土壌 SP-ピット SX-不明遺構
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
7. 本書の編集、執筆は上村が行った。

目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	3
III. 調査成果	5
IV. 考察	30
写真図版	

I. 調査経過と組織

前津丑ノマヤ遺跡は筑後市大字前津字丑ノマヤに所在する。平成17年5月に開発原因者である築地勇氏より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を実施した。試掘調査の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地について構造物及び、地盤改良等による遺構が破壊を受ける可能性がある判断した463.5㎡について本調査を実施することで合意し、調査費用については国庫補助金、県費補助金、市文化財部局により負担した。平成17年7月25日から平成17年9月30日まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成19年3月31日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1) 平成17年度（事前審査）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作
		上村 英士 (事前審査・本調査担当)
		阿比留士朗

2) 平成18年度（調査、報告書作成）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作
		上村 英士 (報告書担当)
		阿比留士朗 (~6月30日)

3) 発掘調査参加者

地元有志

4) 整理作業参加者

整理補助員 丸山 裕見子 猿渡 式子
整理作業員 横溝 愛

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

中島恒次郎、山村信榮、長直信（太宰府市教育委員会）小野野亮（筑紫野市教育委員会）松村一良、小澤太郎（久留米市役所）狭川真一（財団法人元興寺文化財研究所）田中正日子（第一経済大学）木本雅康（長崎外国語短期大学）中村涉（大牟田市教育委員会）岸本圭（福岡県教育庁）



Fig.1 筑後市全図 (1/40000)

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR 鹿児島本線と国道 209 号が縦断し、国道 442 号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

前津地区は標高約 20 m 前後の八女丘陵裾部に位置し、農作物（茶、葡萄、梨）の収穫が盛んな地域である。また、近年宅地化が進んでおり、開発事業も増加している地域でもある。

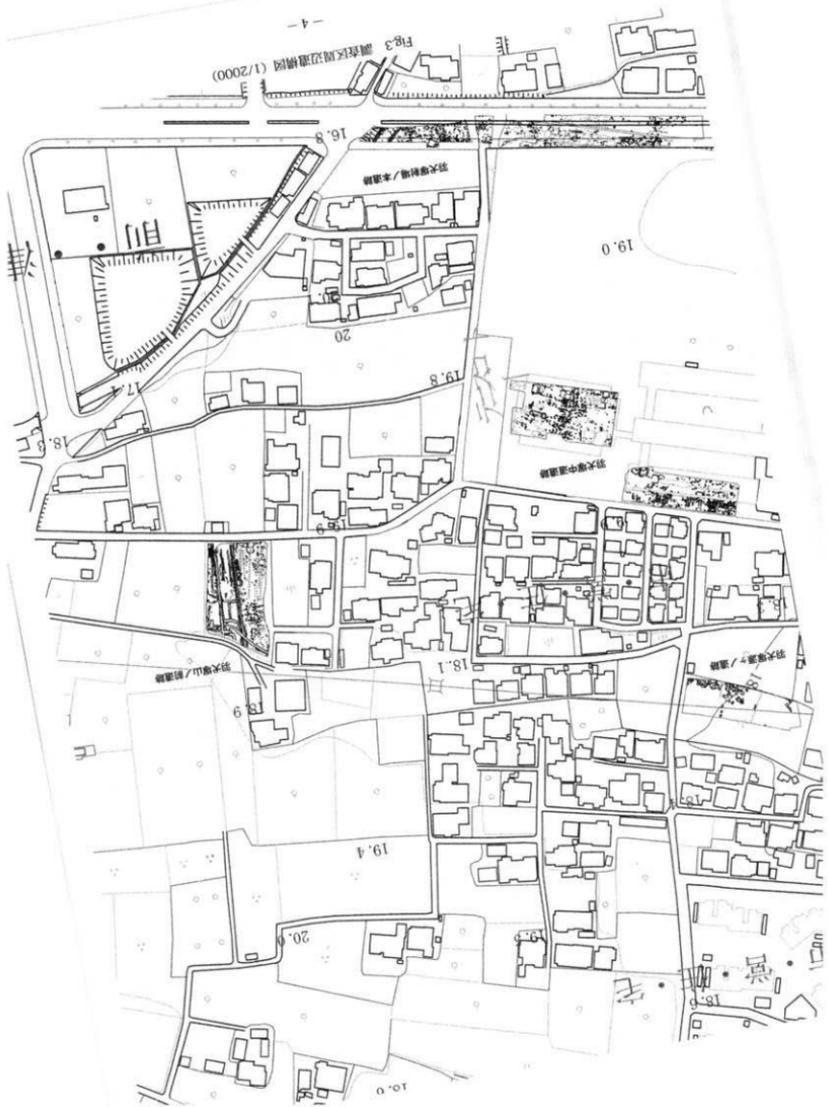
今次調査である前津丑ノマヤ遺跡の周辺遺跡については、当遺跡約 60 m 西に羽犬塚山ノ前遺跡が存在する。調査区中央で大字界が存在しており、字界東側調査区は大字前津字丑ノマヤである。この字界に沿うように古代西海道を南北に検出しており群境を西海道とするならば当遺跡は上妻郡と解釈することができる。当遺跡西へ約 300 m の地点には羽犬塚中道遺跡や羽犬塚射場ノ本が存在する。古代住居群（竪穴・掘立柱建物）を検出しており、「郡符葛野」「東」「足立」等の墨書土器を出土している。古代道路に付随する「駅家」の存在を推定させる遺跡群である。当遺跡北西に 250 m の地点に羽犬塚源ヶ野遺跡が存在し、古代の遺構を検出している。大字前津・羽犬塚地区は西海道を軸に集落若しくは地域拠点として成立していた過程が看取できる地域である。



Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/25000)

1. 前津丑ノマヤ遺跡
 2. 山ノ井南野遺跡第 1 次～4 次 (第 59・64 集)
 3. 徳久中牟田遺跡 (第 19 集)
 4. 長浜館遺跡第 1 次～3 次 (第 33 集)
 5. 前津柳ノ内遺跡第 1 次・2 次 (第 55 集)
 6. 山ノ井川口遺跡第 1・2 次
 7. 羽犬塚射場ノ本遺跡 (第 17 集)
 8. 羽犬塚山ノ前遺跡 (第 48 集)
 9. 羽犬塚源ヶ野遺跡 (49 集)
 10. 羽犬塚中道遺跡第 1 次～5 次 (第 47・65 集)
 11. 羽犬塚寺ノ脇遺跡 (第 24 集)
 12. 和泉トノエ遺跡
 13. 和泉小山内遺跡
 14. 長崎六反遺跡 (第 68 集)
 15. 長崎坊田遺跡 (第 22 集)
 16. 若菜森坊遺跡
 17. 若菜裏遺跡 (第 67 集)
 18. 若菜大堀遺跡第 1 次～3 次 (第 52・67 集)
 19. 久富錦打遺跡 (第 41 集)
- 括弧内数字は筑後市文化財調査報告書所収の番号

Fig. 3 調査区周辺道路地図 (1/2000)



Ⅲ. 調査成果

(1) はじめに

調査区は遺跡範囲である 463.5 m²を設定した。現況は標高約 19.5 m程の畑である。遺構の掘削は表土から遺構面までを(有)フクシマ重機(代表 井上広志)に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。

調査は排土置場の関係上、反転調査を行っている。前半(7月25日～8月31日)を調査区北側の約 200 m²、後半(9月1日～9月30日)を調査区南側の約 200 m²で行い、南側の道路境界部分(約 18 m²)については調査後に確認調査を行った。

層位は約 20 cm～40 cmの耕作土下に約 10～20 cmの暗黒茶色土の包含層を検出し、暗黒茶色土除去後、茶褐色土の整地層を一部で確認している。遺構は暗茶灰色土の地山に切り込む形で検出しているが、一部は茶褐色整地層からの切り込みも考えられる。地山は暗茶灰色土が約 40 cm、下層に明黄褐色土を確認している。遺構面の標高は約 19.0 m程、地形は丘陵裾部南斜面到達点の比較的平坦面であり、検出した遺構はピット、溝、土壇である。

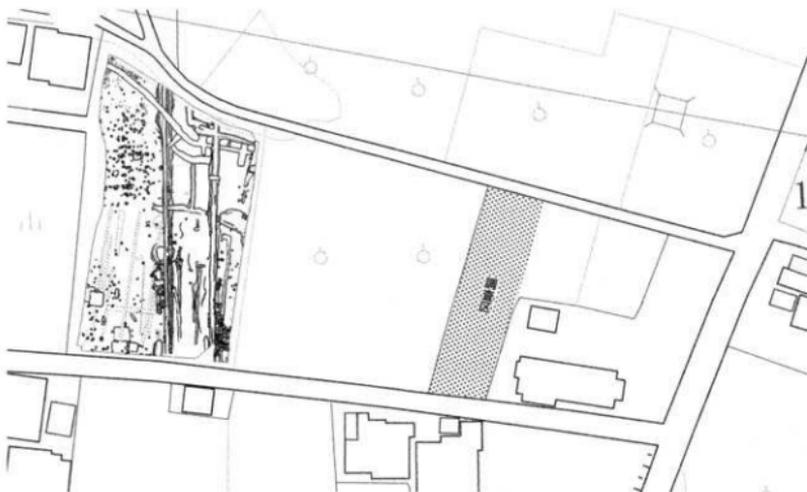


Fig.4 調査地点位置図 (1/1000)

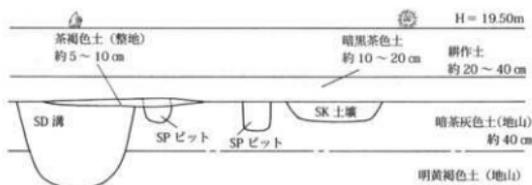


Fig.5 調査区 基本土層図 (1/20)

(2) 検出遺構

溝

SD001 (Fig.6, Pla.4)

調査区中央を東西にやや蛇行しながら走る溝である。検出幅約 1.6 m～1.9 m、深さ約 0.72 m～0.95 m を測る。最低 3 度以上の埋没過程を想定でき、黄色系、茶色系、灰黒色系、黄茶色系、茶褐色系等に分けられる。溝底部の埋土は茶褐色系で硬化している。また、SB045・075 の柱穴を切ると考えられる。遺物は須恵器環、蓋、壺、甕、土師器環、皿、高環、甕、甗、黒色土器椀×土師器椀を出土している。

土壌

SK005 (Fig.6)

SD001 北隣で検出した楕円形に近い隅丸長方形の土壌である。検出長軸約 1.3 m、短軸約 0.89 m を測る。南北にテラスを設け、中央は円形のピット状を呈する。遺物は土師器甕小片のみである。

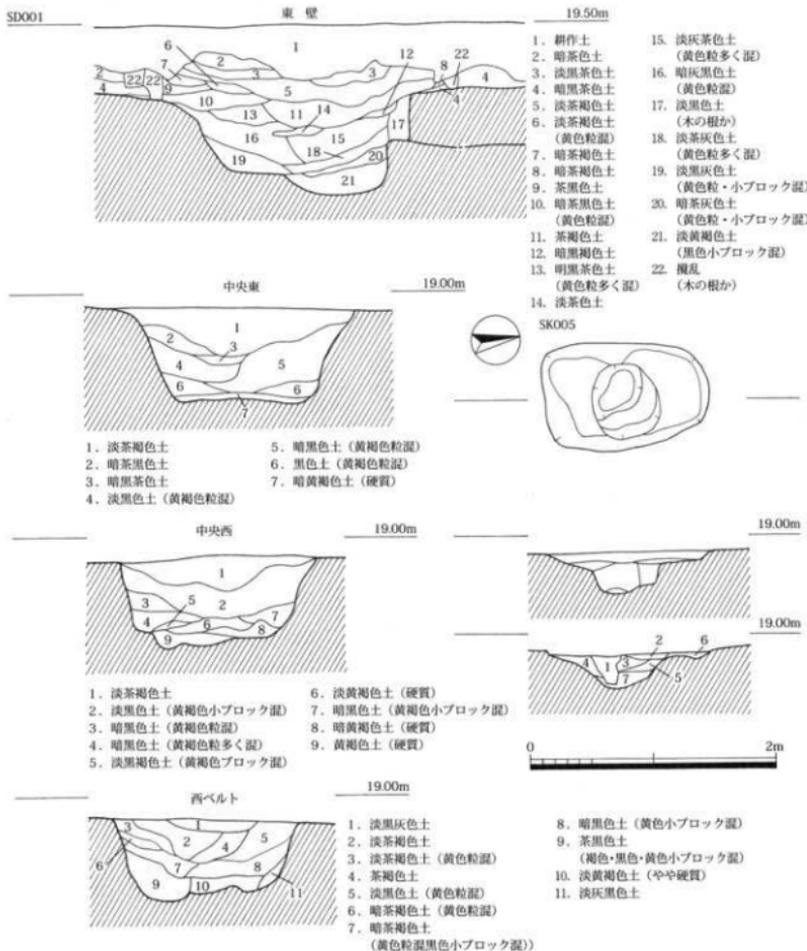


Fig.6 SD001 土層図、SK005 実測図 (1/40)

SK060 (Fig.7, Pla.4～6)

調査区南側のSB055西隣で検出した円形の土壌である。検出長軸約1.97m、短軸約1.84mを測る。埋土は上層で褐色系(一部焼土混)、下層で黒色系となる。墳底で硬化した床状の面を検出している。硬化面までの深さ約0.4m、硬化面除去後までの深さ約0.5mを測る。遺物は須恵器環、蓋、甕、環×蓋、土師器環、環×皿、高環、小甕、甕、甕把手を出土している。

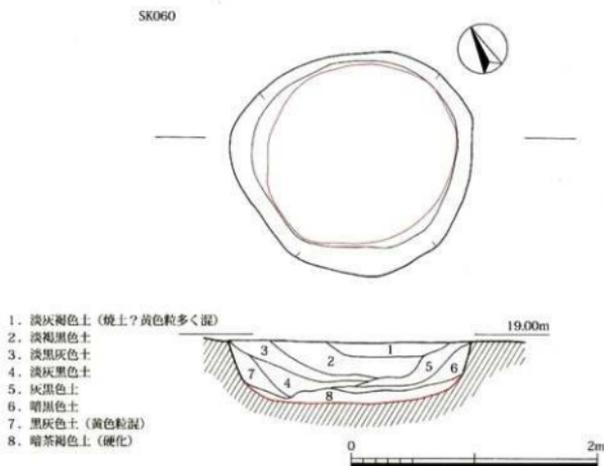


Fig.7 SK060実測図 (1/40)

建物

今次調査では9棟の掘立柱建物を検出している。一部ピットが重複するものも存在するが、可能性として考えられるため報告している。これらの掘立柱建物は方位により3群に分けることができ、現況の地割に近い方位をとる建物群で2種と正方位に近い建物群で1種に分けられる。また、ピット規模について径が70cmを超える建物と径が30～40cm程度の建物に分けることができ、切り合い関係による先後関係が確認できる箇所もあり詳細については「IV.考察」で述べる。

掘立柱建物

SB035 (Fig.8, Pla.6～9)

調査区北側で検出した2間×1間の建物である。建物軸は現況地割とほぼ平行となる方位をとり、桁行でN-24° 3' 1" -Eを測る。柱間総距離(柱芯々間)は桁行3.15m、梁行2.35mを測り、桁行の柱間距離はa-f間で1.65m、f-e間で1.5mを測る。柱穴平面形態は円形であり、柱部分が一段下がる形状を取る。また、全ての柱穴で約0.14m～0.3mの柱痕を確認しており、柱底部は茶褐色の硬化土が見られる。遺物は柱穴a(土師器甕)柱穴c(土師器環×皿)を出土している。

SB075 (Fig.9, Pla.10)

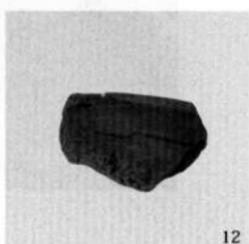
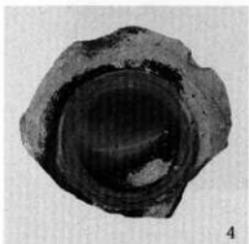
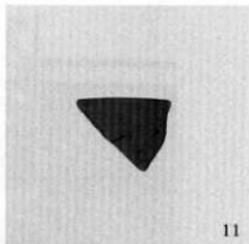
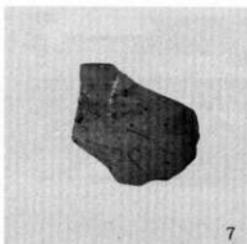
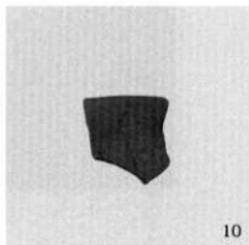
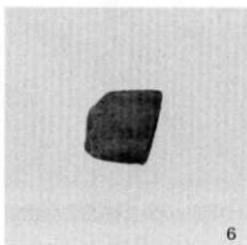
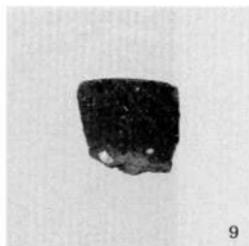
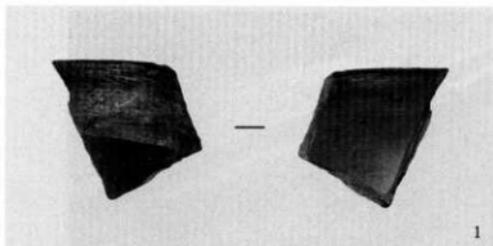
SB035東隣で検出した2間×1間の建物であり、調査区外へ展開する可能性がある。柱間総距離は桁行2.9m、梁行1.5mを測り、桁行でN-14° 55' 53" -Eを測る。桁行の柱間距離はa-f間で1.6m、f-e間で1.3mを測る。柱穴平面形態は円形及び楕円形を呈し、a・f・c柱穴で0.15m～0.2mの柱痕を確認している。遺物は柱穴a、b(土師器片)柱穴c、e(土師器甕)柱穴f(土師器環×皿、甕)を出土している。

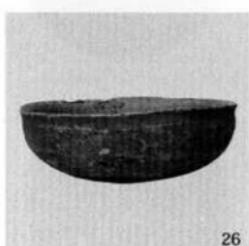
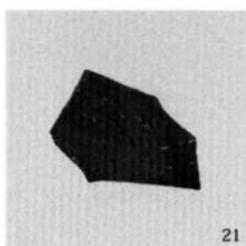
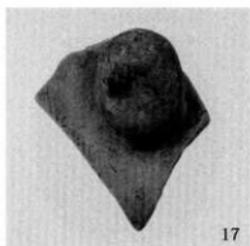
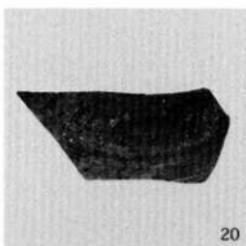
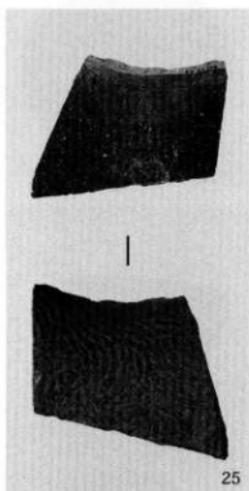
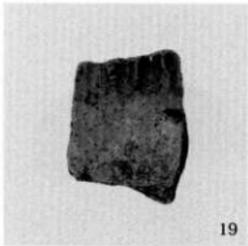
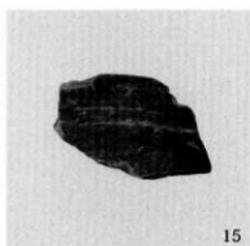
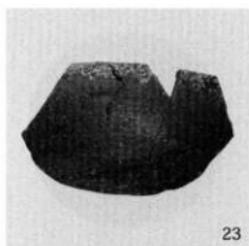
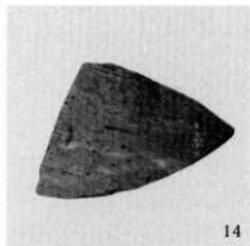


SB080・085・090 完掘状況 (南西から)

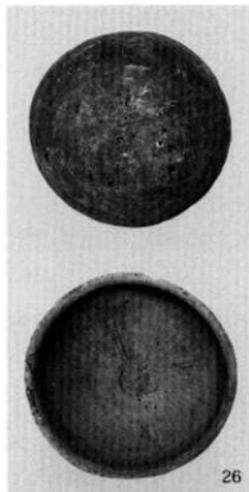


調査区南端完掘状況 (北東から)

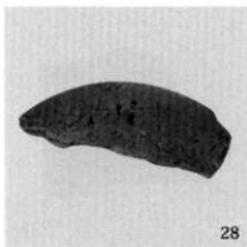




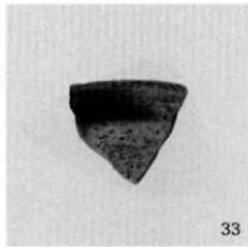
Pla.22



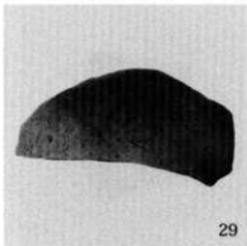
26



28



33



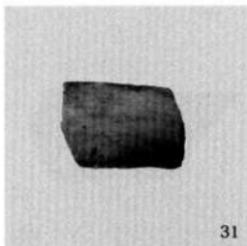
29



35



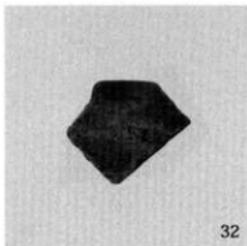
27



31



36



32



37

SB045

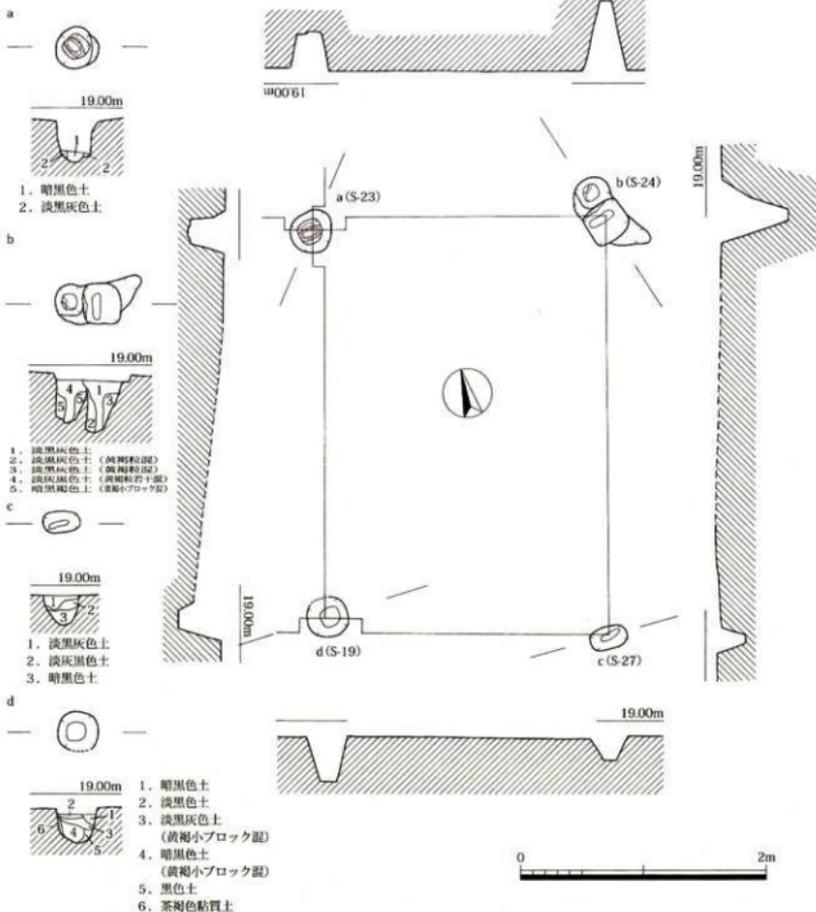


Fig.10 SB045実測図 (1/40)

恵器蓋、土師器甕) 柱穴 h S-42 (土師器環×皿、甕) を出土している。

SB065 (Fig.12, Pla.15 ~ 18)

調査区南側で検出した2間×3間以上の総柱建物であり、調査区外へ展開する。柱間総距離は桁行5.4m、梁行3.6mを測り、桁行でN-55° 53' 54"-Wを測る。桁行、梁行の柱間距離は約1.7~1.9m(ほぼ1.8mに近似した数値)を測る。柱穴平面形態は円形及び楕円形を呈し、径が概ね約0.7m~0.9m程である。また、0.2m程の柱痕を確認しており、土層断面から抜き取り痕跡も確認している。柱穴hではSB0095柱穴cに切られている。遺物は柱穴a(土師器片)柱穴b(土師器甕)柱穴c(土師器甕)柱穴d(土師器甕)柱穴e(土師器環、甕、サヌカイト石籬)柱穴f(土師器甕)柱穴g(須恵器環×蓋)柱穴h(土師器環×皿、甕)柱穴i(須恵器蓋、土師器甕)柱穴j(土師器甕)を出土している。

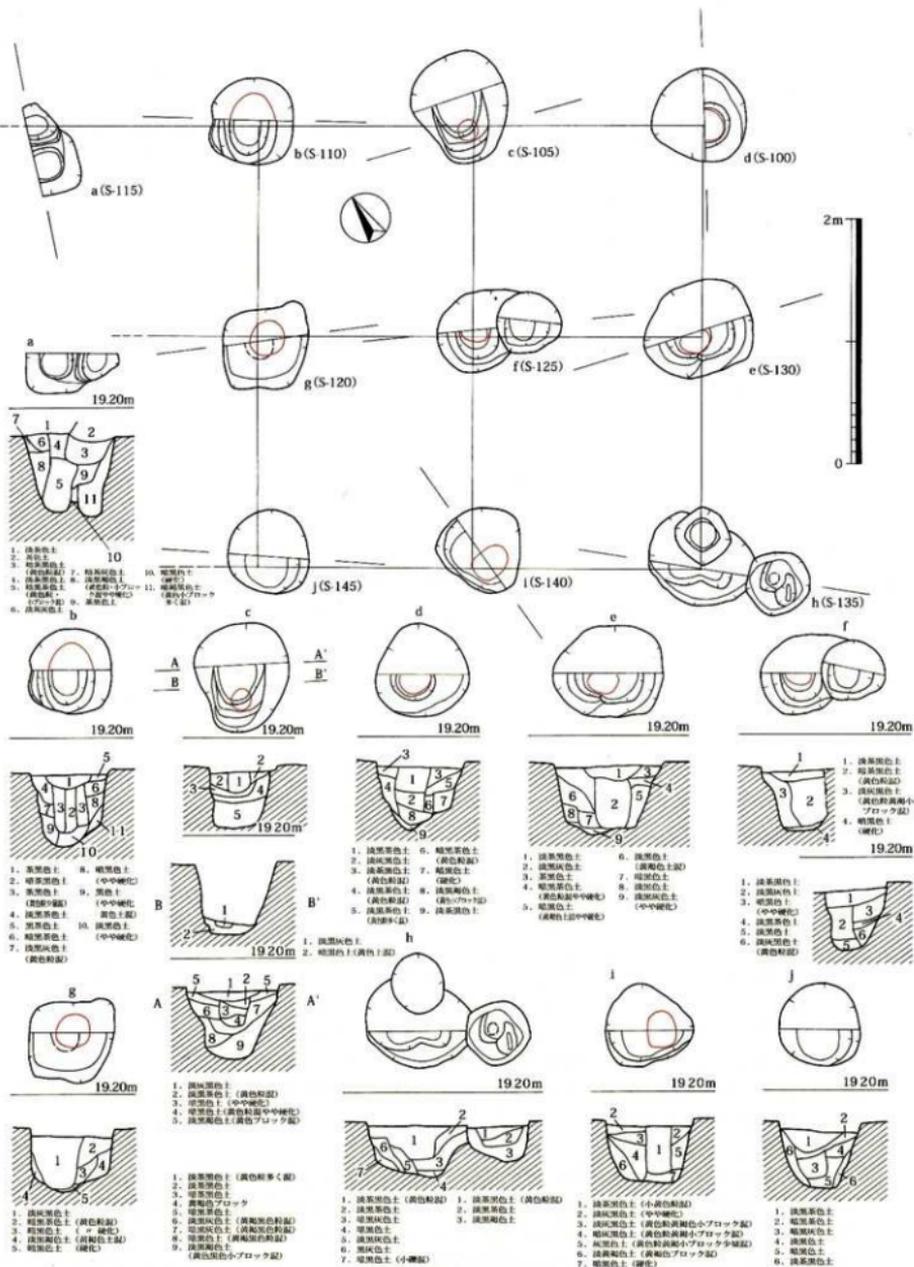


Fig.12 SB065 実測図 (1/40)

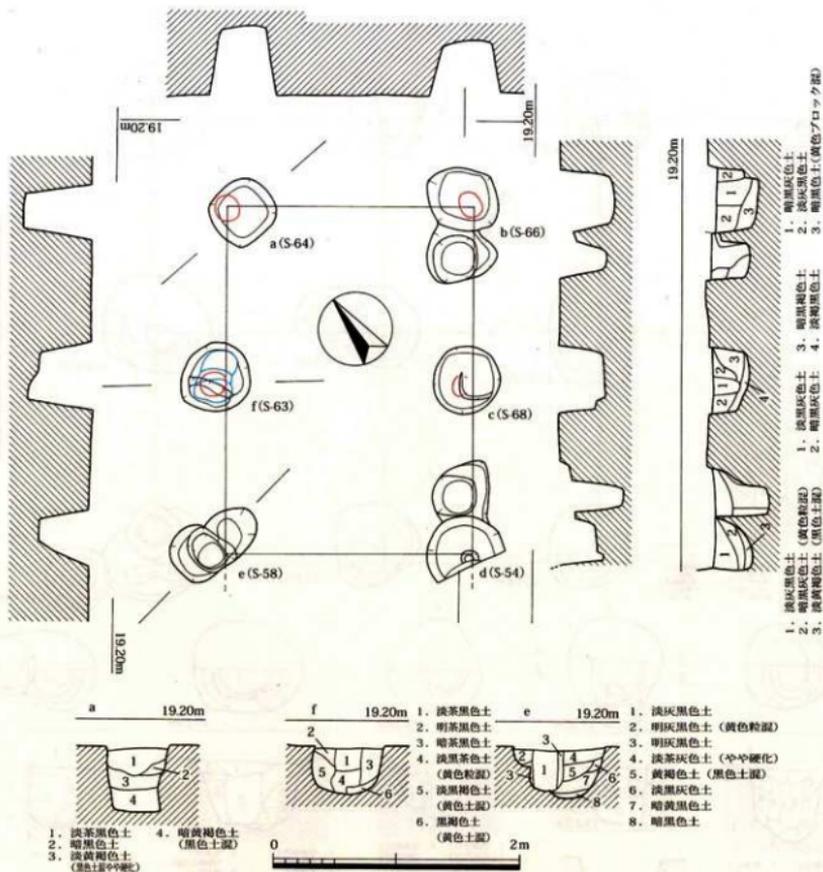


Fig.13 SB080 実測図 (1/40)

SB080 (Fig.13, Pla.18・19)

調査区南東隅で検出した1間以上×2間以上の建物である。重複する建物との切り合い関係はSB085を切り、SB090に切られている。柱間総距離は桁行で2.85m、梁行で2.0m、桁行柱間がa-f間で1.45m、f-e間で1.4mを測り、桁行でN-36°52'12"-Eを測る。柱穴平面はほぼ円形であり、a・b・c・fで検出時に平面状での柱痕を検出している。また、fのみ柱穴底部に硬化が見られた。遺物は柱穴a(土師器甕)柱穴b(土師器環×皿、甕)柱穴c(土師器環×皿、甕)柱穴d(土師器環、環×皿、甕)柱穴e(須恵器環、土師器甕)を出土している。

SB085 (Fig.14, Pla.18・19)

SB080に切られる1間×2間以上の建物である。柱間総距離は桁行で2.7m、梁行で2.0mを測る。柱間は桁行a-b間で1.3m、b-c間で1.4m、f-e間で1.4m、e-d間で1.3mを測る。桁行でN-53°40'23"-Wを測る。柱穴平面は建物外方向にテラスを設ける隅丸三角形に近い形をとり、柱穴aには柱痕が残る。底部は柱穴a・f・eに硬化が見られる。遺物は柱穴c(土師器甕)柱穴d(須恵器環)柱穴f(土師器環×皿、甕)柱穴b(土師器甕)柱穴e(土師器片)を出土している。

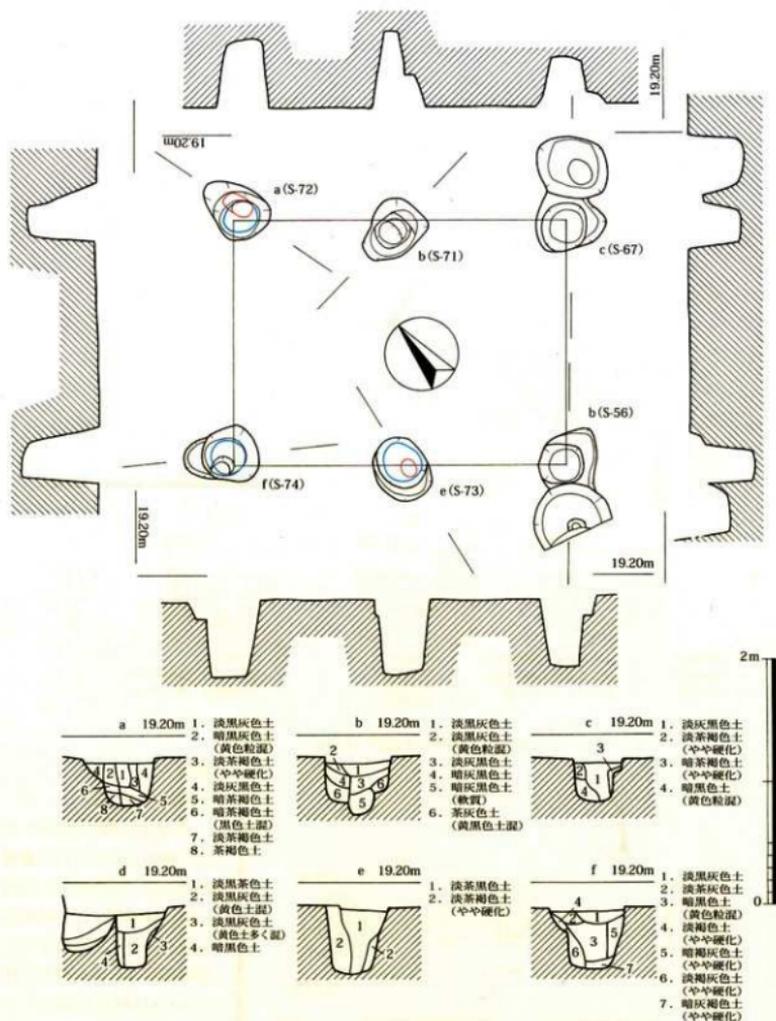


Fig.14 SB085実測図 (1/40)

SB090 (Fig.15, Pla.18・19)

SB080を切る1間×2間以上の建物である。柱間総距離は桁行で3.8m、梁行で1.4mを測る。桁行柱間はa-b間で2.0m、b-c間で1.8mを測る。桁行でN-51° 20' 24" -Wを測る。柱穴平面は円形に近い形をとり、柱穴a・b・dには柱痕が残る。底部は柱穴a・dに硬化が見られる。遺物は柱穴a (土師器環×皿、甕) 柱穴b (土師器環×皿、甕) 柱穴d (土師器甕) を出土している。尚、柱穴bはSB080の柱穴と重複しており、対応柱との関係からSB080に帰属する可能性が高い。

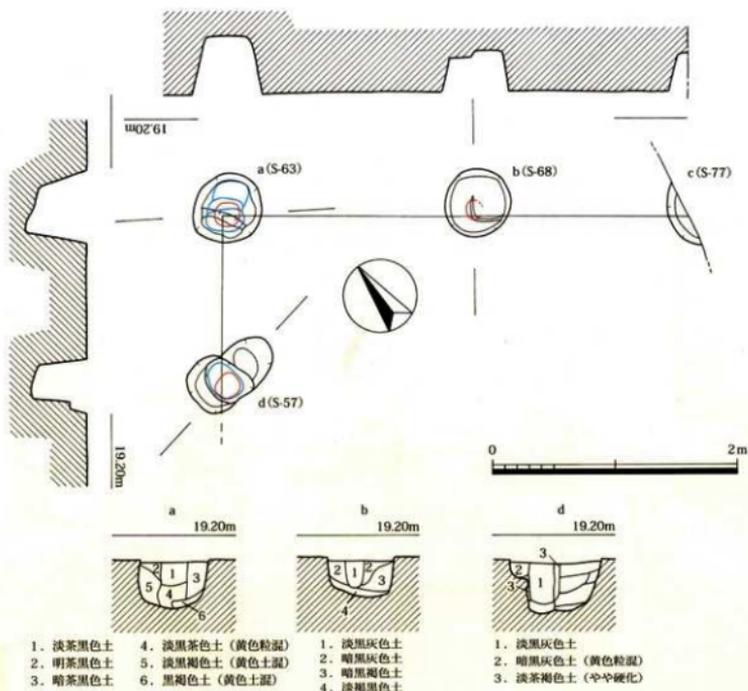


Fig.15 SB090 実測図 (1/40)

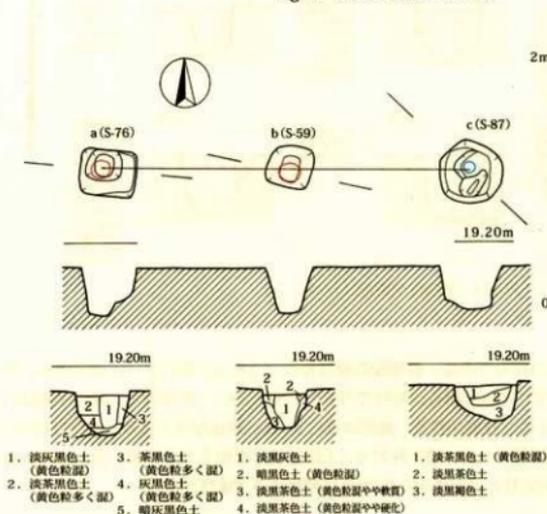


Fig.16 SA095 実測図 (1/40)

柵列

SA095 (Fig.16)

調査区南端のSB065を切る柵列と考えられる遺構であるが、調査区外に展開し掘立柱建物になる可能性もある。ほぼ正方位をとり柱穴間約1.5mを測り、柱穴a・bは柱痕を検出しており、平面が正方形に近く、cは円形であり底部が硬化している。遺物は柱穴a(土師器甕)柱穴b(須恵器蓋、土師器環、甕)柱穴c(須恵器壺×高環、甕、土師器環×皿、甕)を出土している。

(3) 出土遺物

溝

SD001 東壁土層第 15 層 (Fig.17, Pla.20)

土師器×黒色土器 B

坏×碗 (1) 内外面が黒色化し、外面に工具痕が残る。器形は坏であるが黒色土器碗の可能性もある。

SD001 東壁土層第 16 層 (Fig.17, Pla.20)

須恵器

甕 (2) 頸部片で外面タタキ、内面には同心円の当て具痕が残る。外面には暗緑色の自然軸がかかる。

SD001 東壁土層第 19 層 (Fig.17, Pla.20)

土師器

甕 (3) 直立して口縁部が若干開く甕片である。外面は縦方向に近いハケ目、内面は工具によるナデ。

SD001 中央ベルト第 1 層 (Fig.17, Pla.20)

須恵器

壺 (4) 底部片で高台が欠損している。器壁が厚く、焼成時の焼きぶくれが見られる。

甕 (5) 口径 21.4 cm を測る甕である。外面は平行タタキ、内面は平行・格子目痕跡が残る。

土師器

坏×皿 (6) 小片であり、底部欠損している。外面に丹塗り痕跡が見られ、胎土がよく精選されている。

坏 (7) 若干内湾しながら立ち上がる器形をとる。外面に不定方向のヘラケズリを施す。胎土は精選。

土製品

棒状土製品 (8) 手づくねであろう小型の土製品である。外面には火澤状に繊維痕跡が見られる。

SD001 中央ベルト第 2 層 (Fig.17, Pla.20)

須恵器

壺 (9) 口縁部片で外面には波状文が施される。調整はナデ。

土師器

坏 (10・11) 10 は体部片で外面に不定方向のヘラケズリを施す。また、ヘラ記号に近似した痕跡も残る。11 は外面に一部ヘラ削りの痕跡が残る。

甕 (12・13) 共に体部から口縁部片で内面はケズリ、外面はナデ。口縁部はヨコナデ。

SD001 中央ベルト第 2 層～第 4 層 (Fig.17)

須恵器

壺 (14) 肩部片で調整はヨコナデ。2 mm 程度の黒色粒子を多く含む。明灰色で焼成・還元良好である。

土師器

皿 (15) 器高 2.0 cm を測る。外面は丹塗りの痕跡が残る。調整はヨコナデ。

甕 (16～18) 16 は口径 19.0 cm を測る。外面は斜方向のハケ目、内面は斜方向に工具痕が残る。17・18 は甕もしくは甔の把手片である。17 は把手下部の接合部付近に煤が付着し体部外面はハケ目、18 は内面に不定方向のケズリが残る。

不明製品 (19) 器形も部位も不明である。調整はナデで、外面に指頭痕もしくは工具痕が残る。

SD001 (Fig.18・19, Pla.21～23)

須恵器

壺 (20) やや丸みをもつ肩部片で外面はタタキ後ナデ、内面はヨコナデを施す。

蓋 (21・22) 21 は天井部径 8.2 cm を測る。天井部外面を回転ヘラケズリ体部をナデ。暗赤褐色を呈する。

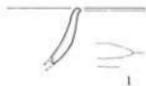
22 は端部片で断面三角形に近い形状をとり、天井部外面回転ヘラケズリ、体部から端部をヨコナデ。

坏 (23・24) 23 は口径 14.0 cm を測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部内面に稜をもつ。調整はヨコナデ、体部下半に自然軸がかかる。明茶灰色を呈する。24 は小片で調整はヨコナデ。

甕 (25) 頸部下半の破片で外面はカキ目を施し黒色の付着物が残る。内面は同心円当て具痕が残る。

土師器

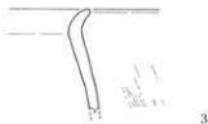
SD001 東壁第15層



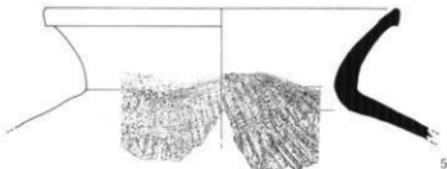
SD001 東壁第16層



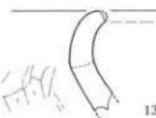
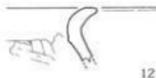
SD001 東壁第19層



SD001 中央ベルト第1層



SD001 中央ベルト第2層



SD001 中央ベルト第2層～第4層

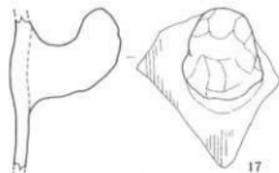
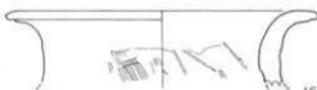
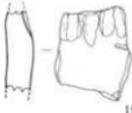


Fig.17 SD001 出土遺物① (1/3)

环 (26 ~ 31) 26 はほぼ完形の环で口径 13.2 cm、器高 4.6 cm を測る。口縁端部を摘みだすように外反させる。内面は放射状に暗文を施し、外面は体部下半から手持ちヘラケズリ、体部口縁部をヨコナデ。27 もほぼ完形の环で口径 12.5 cm、器高 5.2 cm を測る。内面にコテ当て具の痕跡が残る。器壁が厚く底部は手持ちヘラケズリ。28 は底部欠損している环で調整はヨコナデ、体部下半から手持ちヘラケズリ。29 は底部手持ちヘラケズリで内面は不定方向のナデ。胎土が精選されている。皿の可能性もある。30 は調整はヨコナデ、体部下半から手持ちヘラケズリ痕が残る。31 は体部片で外面屈曲部からケズリ、調整はヨコナデ。胎土が良く精選されている。

皿(32～34) 32は器高1.2cmを測り、磨耗のため調整は不明。33は器高1.3cmを測り、底部は回転ヘラ切り。34は器高1.35cmを測り、磨耗のため調整は不明。

高環(35) 脚部片で外面は縦方向にヘラケズリによる面取りをし、内面は横方向の工具によるナデ。外面は丹塗りを施す。

甕(36～42) 36は口径30.2cm、器高25.6cmを測る把手付き甕である。外面は縦方向のハケ目、内面は不定方向のケズリを施し、底部外面はナデ。外面は全面に煤が付着している。37は口径21.0cmを測り、口縁部が強く屈曲し胴が張らないタイプの甕である。外面は斜方向のハケ目、内面は縦方向のケズリを施す。外面に黒斑が残り、茶褐色を呈し焼成良好である。38は口径18.5cm、外面は被熱痕跡および黒色付着物が残り、内面は不定方向にケズリを施す。39は口径19.8cmを測り、内面に斜方向のケズリ痕が残る。外面には煤が付着する。40は口径20.0cmを測り、内面は斜方向のケズリ、口縁部内面は工具によるナデを施す。41は外面をハケ目、内面を縦方向のケズリを施し、口縁部断面には粘土接合痕跡が残る。42は外面は縦方向のハケ目、下半は工具によるナデ、内面は指頭痕が残り、工具によるナデで調整する。

甎(43～46) 43は底部片で穿孔が4箇所以確認できる。44～46は裾部片で外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のケズリを施す。

鍋(47) 鍋の把手部分である。丁寧なつくりで、調整はナデ。

竈(48) 裾部片で器壁が厚く、外面は不定方向に細かいハケ目、内面は横方向に近いケズリを施す。接地面は工具によるナデ。

SK060 第1層 (Fig.19, Pla.23・24)

須恵器

蓋(49) 口径18.2cmを測る。天井部回転ヘラケズリ、調整はヨコナデ。外面は淡黒灰色を呈する。

土師器

環(50) 体部中位で屈曲が強い環片である。外面は丹塗り、屈曲部から下半が手持ちヘラケズリ、内面はヨコナデ。

SK060 第2層 (Fig.19, Pla.24)

土師器

環(51) やや内湾しながら立ち上がる環片で外面は口縁部下から手持ちヘラケズリ、内面はヨコナデ。

高環(52) 脚部裾片で外面はハケ目と細かいミガキを施し、丹塗りである。内面は不定方向の工具痕。

SK060 第3層 (Fig.19, Pla.24)

須恵器

蓋(53) 頂部を凹ませた円錐台状のツマミが付く蓋片で、天井部外面はカキ目、内面は不定方向のナデを施す。

土師器

環(54・55) 54は小片で、調整はヨコナデ、体部下半から手持ちヘラケズリを施す。55は口縁部片で調整はヨコナデ、体部下半から工具痕が残る。

SK060 第6層 (Fig.20, Pla.24)

土師器

環(56) 調整はヨコナデ、体部外面下半から手持ちヘラケズリ。胎土に赤色粒子を含む。

甕(57・58) 57は口縁部片で頸部内面は横方向の工具痕、下半から不定方向にケズリ、端部調整はヨコナデ。外面に煤が付着。58は小型の甕で口縁部欠損で粗いつくりである。器壁が厚く、内面は不定方向にケズリに近い強いナデで仕上げる。外面は不定方向のナデ。

SK060 (Fig.20, Pla.24・25)

須恵器

蓋(59～61) 59は口径14.0cm、器高1.6cmを測る。口縁端部に断面三角形のかえりをもち、天井部外面は回転ヘラケズリである。60はかえりをもつ蓋小片である。61は天井部外面回転ヘラケズリ。

SD001

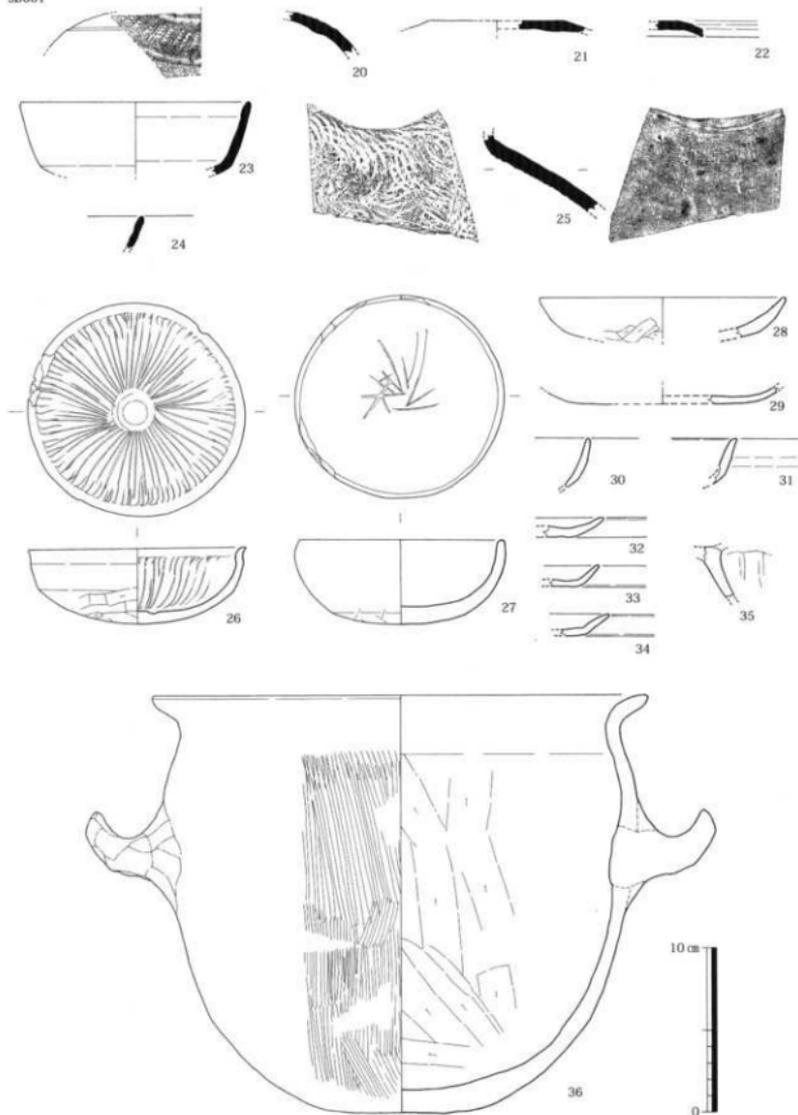
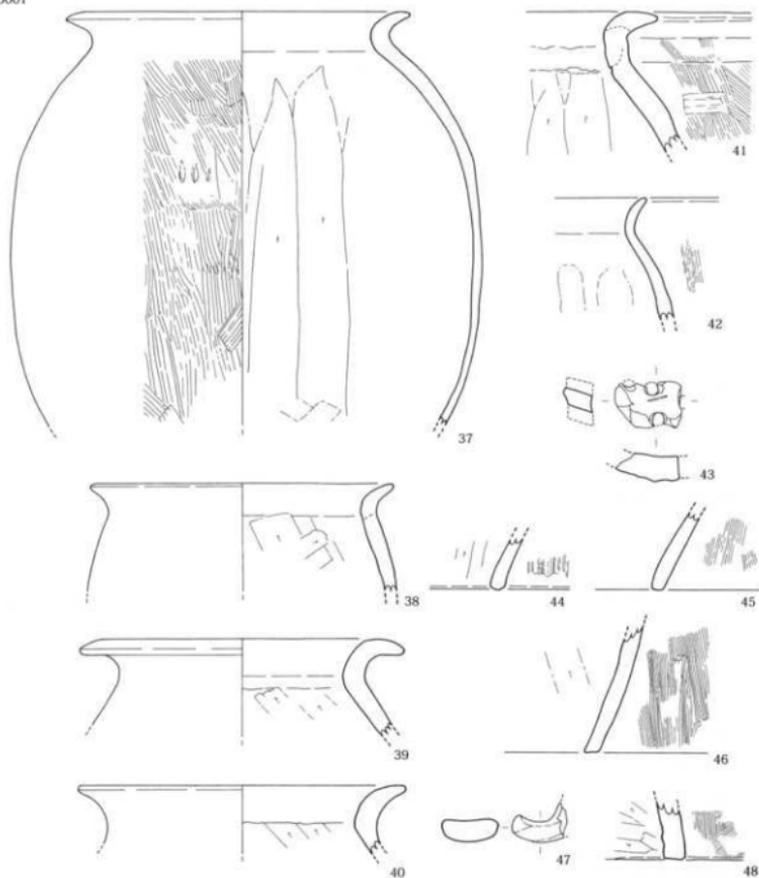


Fig.18 SD001 出土遺物② (1/3)

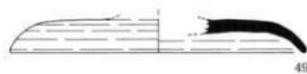
环 (62) 体部小片で直線的に立ち上がる。器壁が薄く、小环である。焼成還元良好。

土師器

环 (63・64) 63は体部外面下半から手持ちヘラケズリ、調整はヨコナデ。64は磨耗が激しく調整は



SK060 第1層



SK060 第2層



SK060 第3層



Fig.19 SD001・SK060 出土遺物 (1/3)

不明であるが、底部は手持ちヘラケズリと考えられる。

皿(65)口縁部小片である。調整はヨコナデ、底部付近は工具によるナデ。

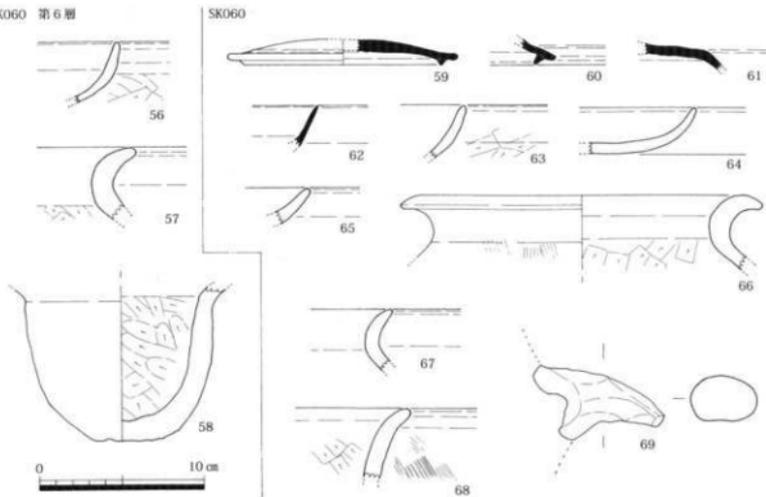


Fig.20 SK060 出土物 (1/3)

甕 (66～69) 66は口径22.0 cm、口縁部を強く外反させるタイプである。口縁部調整はヨコナデ、頸部下外面は縦方向のハケ目、内面はケズリ。67は口縁から頸部にかけて丹塗りである。68は口縁が緩やかに外反するタイプで外面は斜方向のハケ目、内面は斜方向のケズリを施す。69は把手で甕胴部に接合するための痕跡が観察できる。仕上げはナデ。

掘立柱建物

SB035 (b ビット・S-20) (Fig.21)

土師器

甕 (70) 口縁部片で調整はヨコナデ。内外面共に淡橙茶色を呈する。

SB035 (c ビット・S-10) (Fig.21, Pla.25)

土師器

坏×皿 (71) 口唇部から体部外面にかけて丹塗り、体部外面は横方向のミガキを施す。

SB055 (a ビット・S-32) (Fig.21, Pla.25)

土師器

皿 (72) 器高2.0 cmを測る口縁から体部にかけての小片である。調整はヨコナデ。

SB055 (b ビット・S-33) (Fig.21, Pla.25)

土師器

坏×皿 (73) 内外面共に淡橙茶色で調整はヨコナデ。

SB055 (e ビット・S-44 第4層) (Fig.21, Pla.25)

須恵器

坏 (74) 調整はヨコナデ、若干外に開く。内外面共に淡茶灰色を呈する。焼成還元良好。

SB055 (e ビット・S-44 第8層) (Fig.21)

土師器

甕 (75) 口縁部片で調整はヨコナデ。淡橙茶色を呈する。

SB055 (g ビット・S-31 掘り方) (Fig.21, Pla.25)

須恵器

蓋 (76) 天井部片で調整はナデ。焼成還元やや不良。

土製品

粘土塊 (77) 焼成痕跡がある粘土塊である。焼成時の植物繊維痕が残る。

SB055 (h ビット・S-42 第2層) (Fig.21, Pla.26)

土師器

甗 (78) 裾部片で端部が若干内側に湾曲する。外面は縦方向のハケ目、内面は指頭痕が残る。

SB065 (g ビット・S-120 掘り方) (Fig.21, Pla.26)

須恵器

蓋 (79) かえりをもつ蓋で調整はヨコナデ。淡茶灰色を呈し、焼成還元不良である。

SB065 (i ビット・S-140 掘り方) (Fig.21, Pla.26)

須恵器

蓋 (80) 小片で天井部外面は回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ、内面は不定方向のナデ。茶灰色を呈し、焼成還元良好である。

SB065 (j ビット・S-145 掘り方) (Fig.21)

土師器

甗 (81) 口縁部片で調整はヨコナデ。頸部下半からハケ目が見られる。淡橙茶色を呈する。

SB080 (a ビット・S-64) (Fig.21, Pla.26)

土師器

甗 (82) 体部外面をハケ目、内面を指頭痕と不定方向のナデ、口縁部をヨコナデ調整。

SB080 (c ビット・S-68) (Fig.21)

土師器

甗 (83・84) 83は口縁部小片で調整はヨコナデ。84は口縁部内面に強い工具痕跡が残る。

SB080 (d ビット・S-68) (Fig.21)

土師器

坏×皿 (85) 磨耗のため調整は不明であるが、一部ヨコナデ痕跡が残る。淡橙茶色を呈する。

SB085 (c ビット・S-67 第1層) (Fig.21, Pla.26)

須恵器

坏 (86) 口径 10.4 cm、器高 3.4 cm、底径 11.2 cmを測る。底部外面は手持ちヘラケズリ、体部内外面はヨコナデ。内面には自然軸がかかる。淡茶灰色および淡黒灰色を呈する。焼成還元良好。

SA095 (b ビット・S-59) (Fig.21, Pla.26)

須恵器

蓋 (87) かえりをもつ蓋片で調整はヨコナデ。淡茶白色を呈し、還元不良。

SA095 (b ビット・S-59 掘り方) (Fig.21, Pla.26)

土師器

坏 (88) やや内湾する坏片で外面下半から手持ちヘラケズリ、内面は不定方向のナデ。

SA095 (c ビット・S-87 柱痕) (Fig.21, Pla.26)

須恵器

甗 (89) 頸部片で調整はヨコナデ、外面には自然軸がかかる。焼成還元良好。

SA095 (c ビット・S-87) (Fig.21, Pla.26)

土師器

甗 (90) 口縁部小片で体部外面ハケ目、内面斜方向の工具痕及び指頭痕、口縁部はヨコナデ調整。

SP061 (掘り方) (Fig.21, Pla.26)

土師器

坏 (91・92) 91は内外面に細かい横方向に近いミガキを施す。明赤茶色を呈する。92はヨコナデ調整で淡橙茶色を呈する。

SP061 (第1層) (Fig.21, Pla.26)

土師器

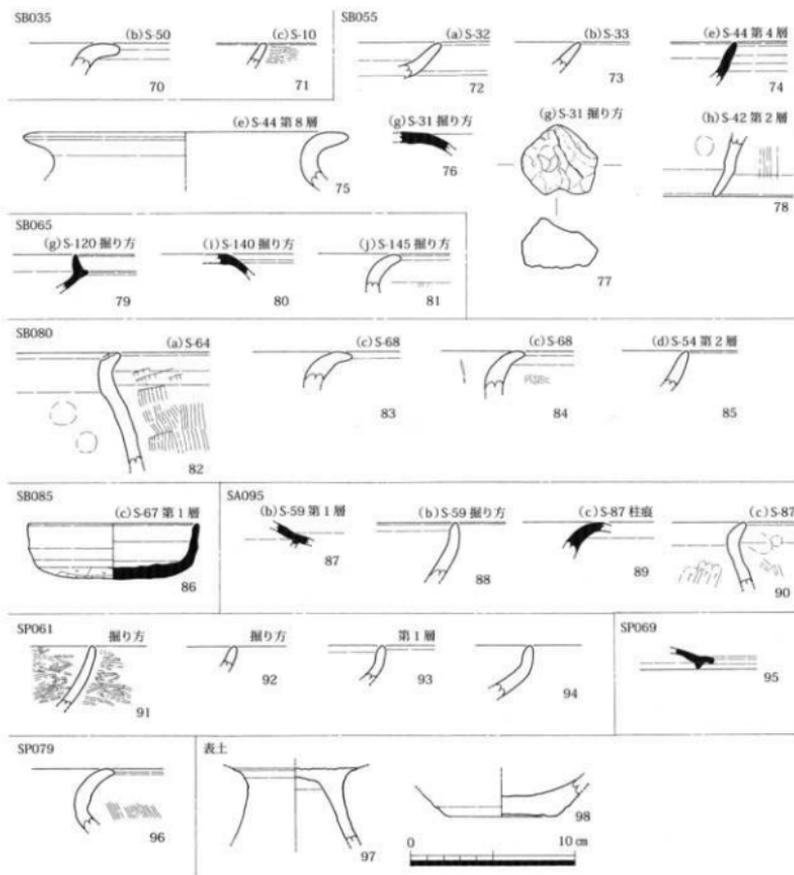


Fig.21 掘立柱建物他 出土遺物 (1/3)

环 (93) やや内湾する口縁をもつ坏片で外面に丹塗り痕跡が一部残る。

SPO61 (Fig.21, Pla.26)

土師器

环 (94) 体部外面からやや内湾しながら屈曲に近い器形をとる。磨耗のため調整は不明。焼成不良。

SPO69 (Fig.21, Pla.26)

須恵器

蓋 (95) かえりをもつ蓋片で調整はヨコナデ。胎土に黑色粒子を含み、焼成還元やや不良。

SPO79 (Fig.21, Pla.26)

土師器

蓋(96)口縁部片で頸部外面から斜方向にハケ目を施す。口縁部はヨコナデ。胎土がよく精選されている。

表土 (Fig.21, Pla.26)

土師器

高环 (97) 脚部片で环部との接合時の工具痕が残る。内面は斜方向の工具痕が残り、外面は不明。

甕 (98) 底径 6.5 cmを測り、外面には粗い繊維状の痕跡が残る。内面は不定方向の工具痕が残る。

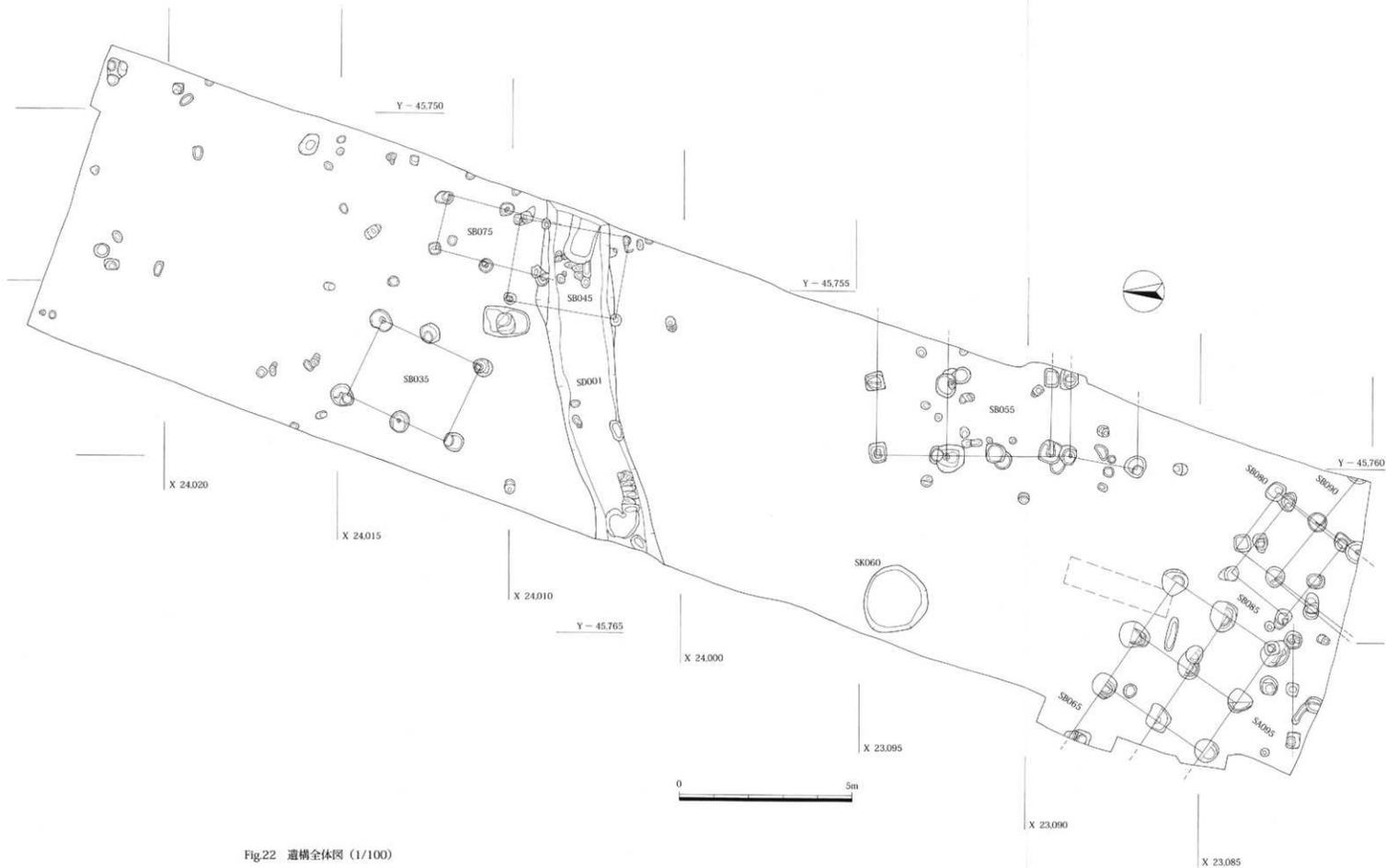


Fig.22 遺構全体図 (1/100)

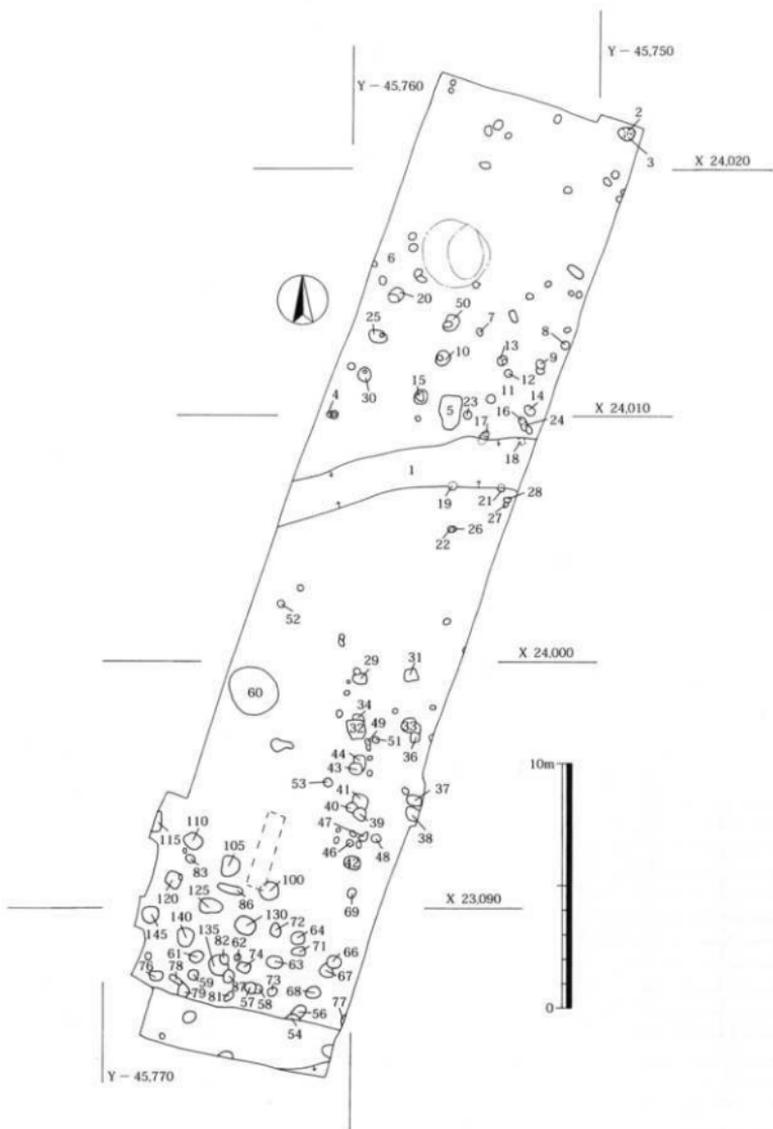


Fig.23 遺構略側図 (1/200)

Tab. I 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	遺構内容	切り合い関係(新→旧)及び特記事項
1	SD001	溝	1→17・18・19・21
2		ビット	
3		ビット	
4		ビット	柱痕有
5	SK005	土壇	
6		ビット	柱痕有
7		ビット	
8		ビット	
9		掘立柱建物ビットSB045	
10		掘立柱建物ビットSB035	
11		掘立柱建物ビットSB045	
12		ビット	
13		掘立柱建物ビットSB045	
14		掘立柱建物ビットSB045	
15		掘立柱建物ビットSB035	
16		ビット	24→16
17		掘立柱建物ビットSB045	1→17
18		掘立柱建物ビットSB045	1→18
19		掘立柱建物ビットSB075	1→19
20		掘立柱建物ビットSB035	
21		ビット	1→21
22		ビット	22→26
23		掘立柱建物ビットSB075	
24		掘立柱建物ビットSB075	24→16
25		掘立柱建物ビットSB035	
26		ビット	22→26
27		ビット	27→28
28		掘立柱建物ビットSB075	27→28
29		掘立柱建物ビットSB055	
30		掘立柱建物ビットSB035	
31		掘立柱建物ビットSB055	
32		掘立柱建物ビットSB055	32→34
33		掘立柱建物ビットSB055	33→36
34		掘立柱建物ビットSB055	32→34
35	SB035	掘立柱建物 S-10・15・20・25・30・50	現在の地割に方位が示されている
36		掘立柱建物ビットSB055	33→36
37		掘立柱建物ビットSB055	
38		掘立柱建物ビットSB055	
39		掘立柱建物ビットSB055	39→40→41
40		掘立柱建物ビットSB055	39→40→41
41		掘立柱建物ビットSB055	39→40→41
42		掘立柱建物ビットSB055	
43		掘立柱建物ビットSB055	43→44
44		掘立柱建物ビットSB055	43→44
45	SB045	掘立柱建物 S-9・11・13・14・17・18	
46		ビット	
47		ビット	
48		ビット	
49		ビット	
50		掘立柱建物ビットSB035	
51		ビット	

52		ビット×木の根	
53		ビット	
54		掘立柱建物ビットSB080	54→56
55	SB055	掘立柱建物 S-29・31・32・33・34・36・37・38・39・40・41・42・43・44	ほぼ正方位をとる建物。2面底か?
56		掘立柱建物ビットSB085	54→56
57		掘立柱建物ビットSB090	57→58
58		掘立柱建物ビットSB080	57→58
59		掘立柱建物ビットSB095	
60	SK060	土壌	墳底に硬化した床状の痕跡有
61		ビット	
62		ビット	
63		掘立柱建物ビットSB080、掘立柱建物ビットSB090	
64		掘立柱建物SB080	
65	SB065	掘立柱建物 S-100・105・110・115・120・125・130・135・140・145	2間×3間以上の総柱建物
66		掘立柱建物ビットSB080	66→67
67		掘立柱建物ビットSB085	66→67
68		掘立柱建物ビットSB080、掘立柱建物ビットSB090	
69		ビット	
70		欠番	
71		掘立柱建物ビットSB085	
72		掘立柱建物ビットSB085	
73		掘立柱建物ビットSB085	
74		掘立柱建物ビットSB085	
75	SB075	掘立柱建物 S-19・23・24・28	
76		掘立柱建物ビットSB095	
77		掘立柱建物ビットSB090	
78		ビット	78→79
79		ビット	78→79
80	SB080	掘立柱建物 S-54・58・63・64・66・68	
81		ビット	
82		ビット	82→135
83		ビット	
84		欠番	
85	SB085	掘立柱建物 S-56・67・71・72・73・74	各ビットの平面形が三角形に近い
86		ビット?	
87		掘立柱建物ビットSB095	87→135
88		欠番	
89		欠番	
90	SB090	掘立柱建物 S-57・63・68・77	
95	SB095	掘立柱建物 S-59・76・87+確認調査部分ビット	ほぼ正方位をとる建物
100		掘立柱建物ビットSB065	
105		掘立柱建物ビットSB065	
110		掘立柱建物ビットSB065	
115		掘立柱建物ビットSB065	
120		掘立柱建物ビットSB065	
125		掘立柱建物ビットSB065	
130		掘立柱建物ビットSB065	
135		掘立柱建物ビットSB065	82→135、87→135
140		掘立柱建物ビットSB065	
145		掘立柱建物ビットSB065	

IV. 考察

今次調査から検出された主な遺構は掘立柱建物、土壇、溝である。以下、各遺構の特徴について記述し、遺跡の概要を述べる。

計 8 棟の掘立柱建物と欄列を 1 遺構検出した。これらには建物主軸方位や切り合い関係により分けられ、主軸がほぼ正方位をとる SB055、SA095 (A 群) と、正方位から東へ 13° ~ 25° 程度触れる SB035・075・045 (B 群)、同じく東へ 34° ~ 39° 程度振れる 065・080・085・095 (C 群) に分けられる。また、切り合い関係から SB065 を切る SA095、SB085 を切る SB080、SB080 を切る SB090 等の先後関係を示す遺構の存在がある。また、A 群とした 3 棟は調査区北側に展開し、B・C 群は調査区南側に展開する。

切り合い関係

旧→新

SB065 (C 群) → SA095 (A 群)

SB085 (C 群) → SB080 (C 群)

SB080 (C 群) → SB090 (C 群)

遺構の規模については調査区が狭小なため遺構全体の把握ができないが、柱穴の径により分けられる。

柱穴が約 60 cm 以下の規模を呈する遺構

SB075 (B 群) SB045 (B 群) SB080 (C 群) SB085 (C 群) SB090 (C 群) SA095 (A 群)

柱穴が約 60 cm 以上の規模を呈する遺構

SB035 (B 群) SB055 (A 群) SB065 (C 群)

各群において柱穴規模の大きい建物が 1 棟は存在し、さらに小さい規模の建物が配置されている状況である。

また、建物の構造は SB055 (A 群) においては南北二面庇と想定し、SB065 (C 群) については総柱建物と考えられ、他の建物と構造を異にしている。

各群または建物単位での時期については出土遺物から概ね、A 群である SB055 を 8 世紀中頃、SA095 を 8 世紀前半、B 群である SB035 を 8 世紀前半、C 群である SB065・SB080・SB085 を 8 世紀前半と考える。

したがって、遺構の方位および切り合い、遺物の時期により

A 群 8 世紀中頃 (SA095 は 8 世紀前半であるが切り合い上、C 群より新しい)

B 群 8 世紀前半

C 群 8 世紀前半 (建物単位で切り合いがあるため時期変遷がある)

これらの遺構の評価をしていく上で、周辺の当該時期の遺跡を概観し、今次調査の遺構の把握をしていく。

今次調査の西約 60 m の位置に羽犬塚山ノ前遺跡がある。調査区の南北に古代の道路である西海道が走り、道路西側では道路方位と同じにして 8 世紀後半代の竪穴住居が存在する。なお、道路側溝は 9 世紀前半代には埋没していると考えられる。羽犬塚山ノ前遺跡から南西へ約 200 m の位置に羽犬塚中道遺跡、羽犬塚射場ノ本遺跡がある。これらの遺跡は 8 世紀前半代の竪穴住居を中心に 9 世紀代の遺構まで展開しており遺構の密度も高い。羽犬塚中道、羽犬塚射場ノ本、羽犬塚山ノ前遺跡では何れも出土遺物に墨書土器をもつ。特に羽犬塚中道遺跡では「郡符葛□」(□は野の可能性有) 墨書土器 (8 世紀後半) や 100 点以上の「東」が底部に記載された土師器が出土しており、延喜式記載の「葛野駅家」の想定地として考えられている。

これら周辺の遺跡に対して、今次調査の遺構の相違点を挙げると

- ・西海道西側においての諸遺跡では 8 世紀代の建物は竪穴住居である。
- ・羽犬塚中道遺跡等の掘立柱建物は柱穴が約 60 cm 程度若しくは以下である。

- ・周辺遺跡では今次調査のA群のような正方位をとる掘立柱建物が存在しない。また、周辺遺跡の殆どの掘立柱建物や竪穴住居が今次調査掘立柱建物B・C群と同様に東へ振れる。
- ・周辺遺跡では8世紀前半から9世紀代の遺物が豊富にあるが、今次調査では8世紀中頃までの遺物しか出土していない。

以上の点から今次調査の遺跡の性格を推定してみる。

先学による研究で「葛野駅家」を羽犬塚周辺に想定した根拠として、大字「羽犬塚」が「早馬」=「駅家」の転訛であること、調査地の小字「丑ノマヤ」は「駅家」の転訛であること、西海道の御井駅から南へ25里(約12km)の延長上に羽犬塚周辺が該当することから調査地周辺を「駅家」想定地として考えられてきた。現在までの発掘調査では、先に述べた羽犬塚中道遺跡の「都符葛□」の墨書土器出土において更に「駅家」推定地が絞られた。しかし、羽犬塚山ノ前遺跡で西海道を検出したことにより郡境の問題が生じてきた。先学による条理研究で西海道を郡境とし、東側を上妻郡、西側を下妻郡と推定し、延喜式の「葛野駅家」は上妻郡に属す駅家である。したがって、「都符葛□」墨書土器出土の羽犬塚中道遺跡は西海道西側に存在すること、検出された遺構群が8世紀代の竪穴住居を中心に展開することから「駅家」としての機能を果たしていたか疑義が生じてきた。これらの成果から今次調査で検出した8世紀代の掘立柱建物が何を示唆しているのかが問題となってくる。

今次調査の掘立柱建物は8世紀前半から中頃にかけての建物である。先に述べたとおり、周辺遺跡に当該期の建物は竪穴住居であるため、構造が大きく違う。したがって、西海道から東へ約60mしか離れていない場所に正方位(西海道ラインとほぼ同じ軸)二面庇をとるSB055は「駅家」関連施設として非常に注目すべき遺構である。また、8世紀前半代と考えられるSB065等の柱穴径が大きく、且つ総柱建物の存在は、羽犬塚中道遺跡等の竪穴住居群の方位と合致するため道路施工時期に近い在地有力者の建物群、若しくは上妻郡や葛野郷に関する建物と想定できるのではないだろうか。

これらを総括し仮定を試みると、西海道施工前の地割りによる竪穴住居集落の形成(羽犬塚中道遺跡、羽犬塚射場ノ本遺跡～8世紀前半)が行われ、在地有力者若しくは郡、郷による掘立柱建物の形成(前津丑ノマヤ遺跡SB065等～8世紀前半)、西海道の施工(羽犬塚山ノ前遺跡)、駅家関連施設の形成(前津丑ノマヤ遺跡SB055～8世紀中頃)、西海道施工後の竪穴住居の形成(羽犬塚山ノ前遺跡8世紀後半)、西海道側溝廃絶後の整地(羽犬塚山ノ前遺跡9世紀前半)、掘立柱建物の形成(羽犬塚中道遺跡9世紀)という一連の流れを想定する。

今次調査では「駅家」本体であると断定できる遺構は確認できなかったが、西海道東側での初めての調査で周辺遺跡を含めた仮説を立てられる遺構群が検出された。今後、この仮説を埋めるべく、近隣調査での成果を期待したい。また、調査地北側小字である「車路」においても「駅家」推定地としての可能性をもっておかなければならない。

参考文献

- 松村一良「筑後地方を縦断する古代駅路」『MUSEUM KYUSHU』第9号 1983
 『羽犬塚射場ノ本遺跡』筑後市文化財調査報告書第17集 1995
 『羽犬塚山ノ前遺跡』筑後市文化財調査報告書第48集 2003
 『筑後市内遺跡VI』筑後市文化財調査報告書第65集 2005
 『羽犬塚山ノ前遺跡II』筑後市文化財調査報告書第60集 2005
 日野尚志「筑後国 上妻 下妻 山門 三毛 四郡における条理について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第26集 1978
 日野尚志「筑後国の郡家について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第36集 1988
 日野尚志「筑後国上妻郡家について - 筑後国風土記 逸分の内容を中心として」『広島史学研究会』1972

PLATE



調査区完掘状況（真上から）デジタルモザイクにより合成

Pla.2



北側調査区検出状況(真上から)



北側調査区完掘状況(真上から)



南側調査区検出状況（真上から）



南側調査区完掘状況（真上から）

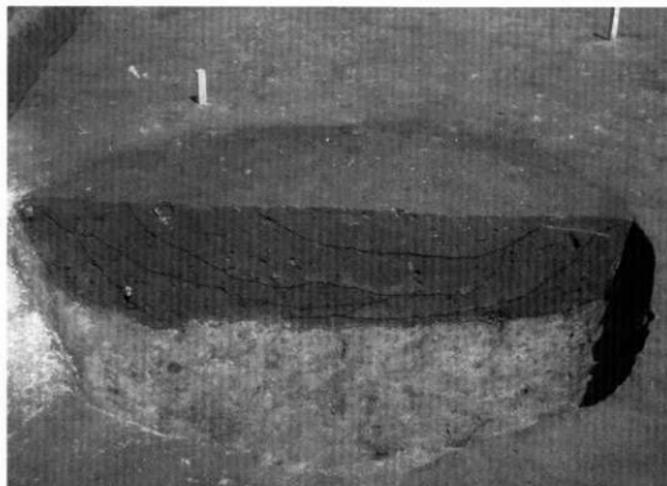
Pla.4



SD001 完掘状況 (北東から)



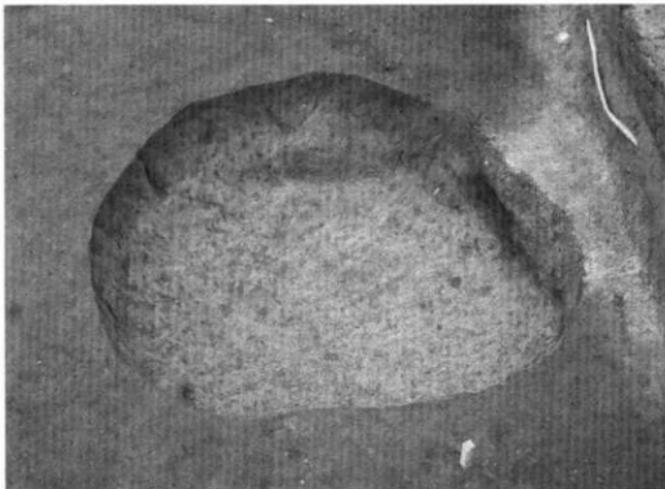
SK060 検出状況 (北東から)



SK060 土層観察 (南西から)



SK060 床面確認状況 (北東から)



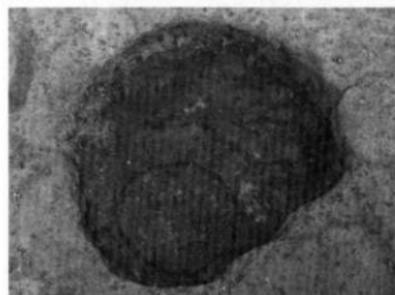
SK060 完掘状況 (北東から)



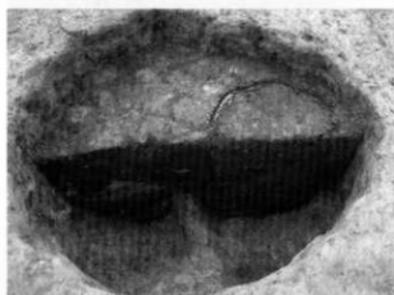
SB035 検出状況 (南西から)



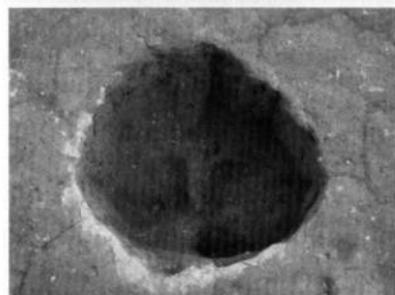
SB035 完掘状況 (南西から)



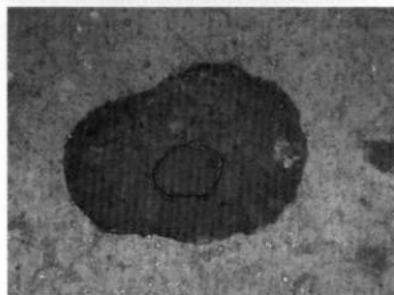
SB035 a (S-20) 検出状況 (南から)



SB035 a (S-20) 土層観察 (西から)

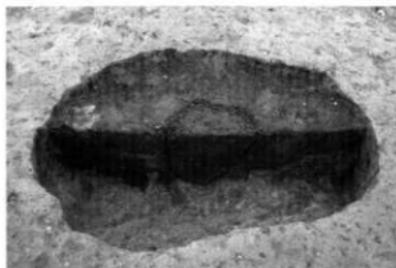


SB035 a (S-20) 完掘状況 (西から)

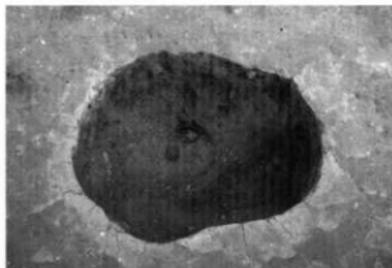


SB035 b (S-50) 検出状況 (東から)

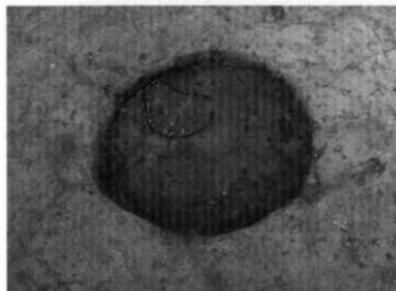
Pla.8



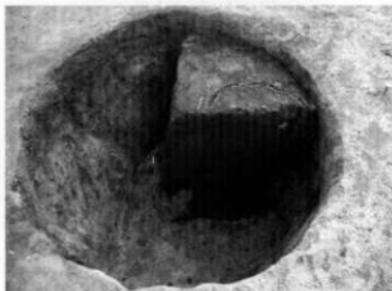
SB035 b (S-50) 土層観察 (北西から)



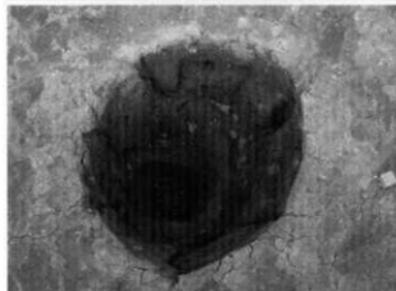
SB035 b (S-50) 完掘状況 (北西から)



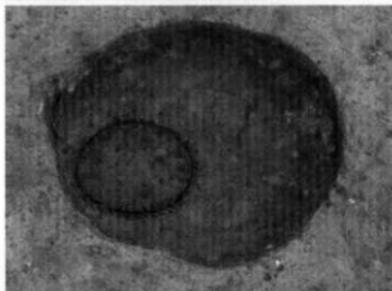
SB035 c (S-10) 検出状況 (南から)



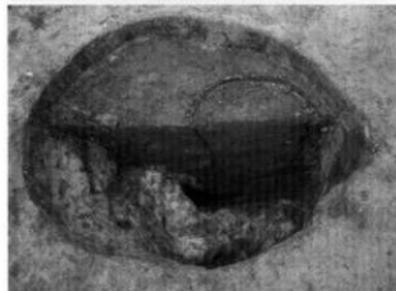
SB035 c (S-10) 土層観察 (北から)



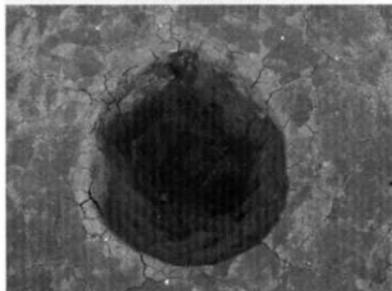
SB035 c (S-10) 検出状況 (南から)



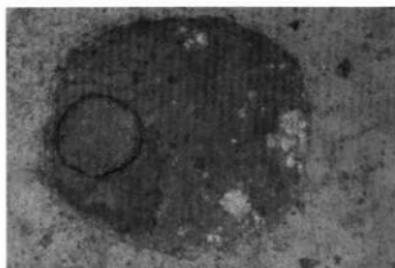
SB035 d (S-15) 土層観察 (西から)



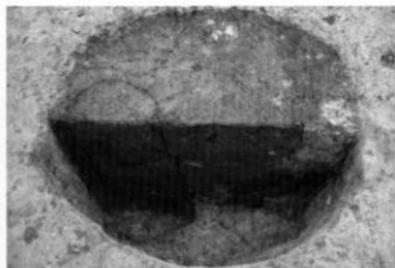
SB035 d (S-15) 土層観察 (東から)



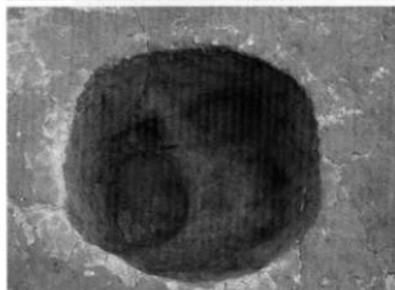
SB035 d (S-15) 完掘状況 (南から)



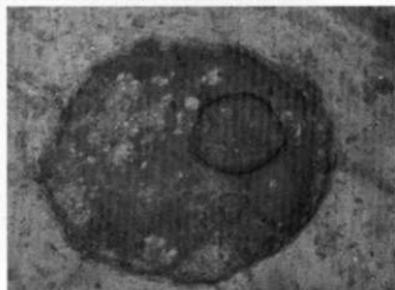
SB035 e (S-30) 検出状況 (西から)



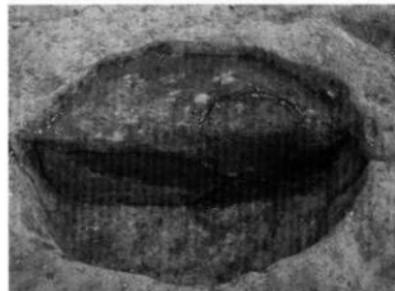
SB035 e (S-30) 土層観察 (西から)



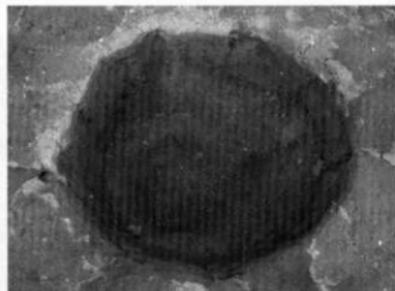
SB035 e (S-30) 完掘状況 (西から)



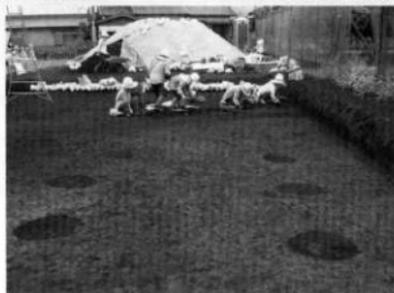
SB035 f (S-25) 検出状況 (南から)



SB035 f (S-25) 土層観察 (南から)



SB035 f (S-25) 完掘状況 (南から)



作業状況



SB075・045 完掘状況 (北東から)



SB035・075・045 完掘状況 (北東から)

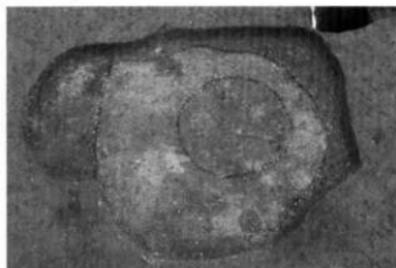


SB055 検出状況 (北から)

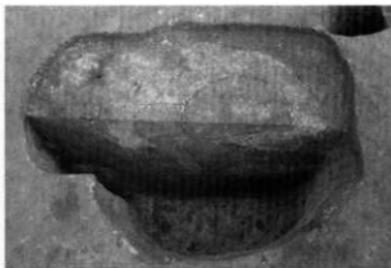


SB055 完掘状況 (北から)

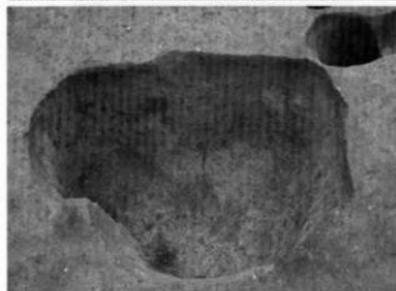
Pla.12



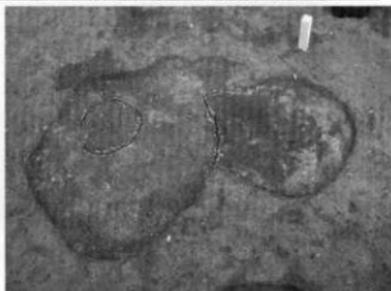
SB055 a (S-32・34) 検出状況 (西から)



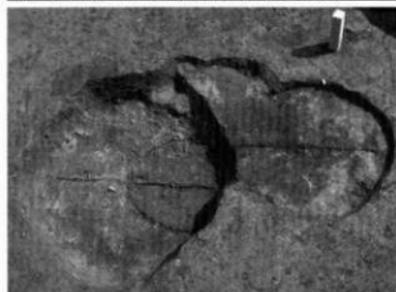
SB055 a (S-32・34) 土層観察 (西から)



SB055 a (S-32・34) 完掘状況 (西から)



SB055 b (S-33・36) 検出状況 (西から)



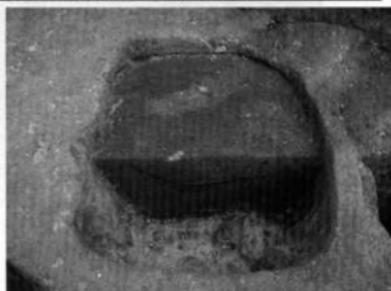
SB055 b (S-33・36) 検出状況 (西から)



SB055 b (S-33・36) 完掘状況 (西から)



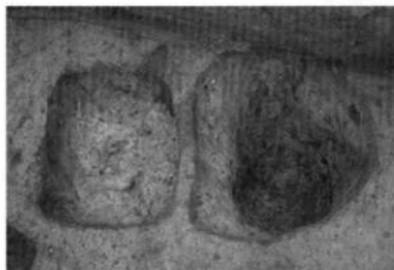
SB035 c (S-37・38) 検出状況 (西から)



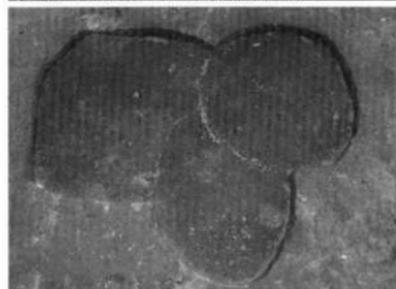
SB035 c (S-37) 土層観察 (西から)



SB055 c (S-38) 土層観察 (西から)



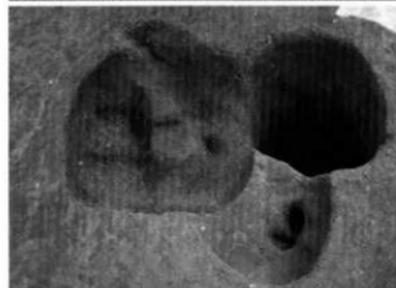
SB055 c (S-37・38) 完掘状況 (西から)



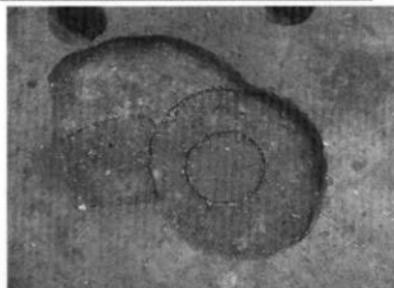
SB055 d (S-39・40・41) 検出状況 (西から)



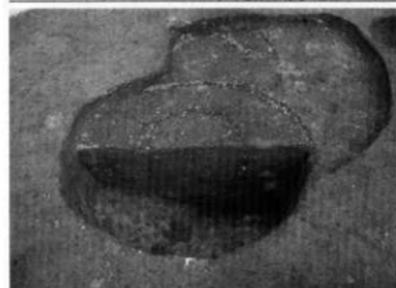
SB055 d (S-41) 土層観察 (西から)



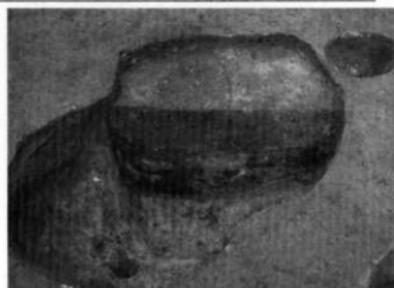
SB055 d (S-39・40・41) 完掘状況 (西から)



SB055 e (S-43・44) 検出状況 (北西から)



SB055 e (S-43) 土層観察 (南から)

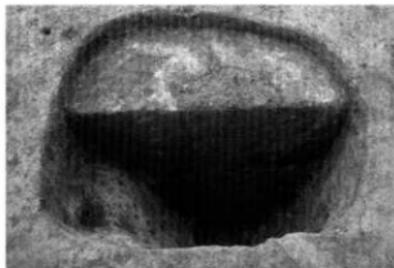


SB035 c (S-44) 土層観察 (南から)

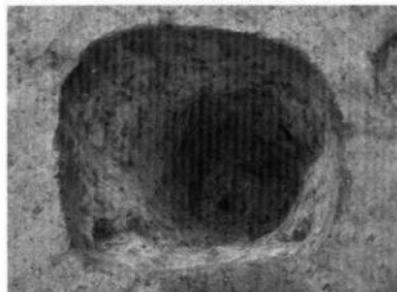
Pla.14



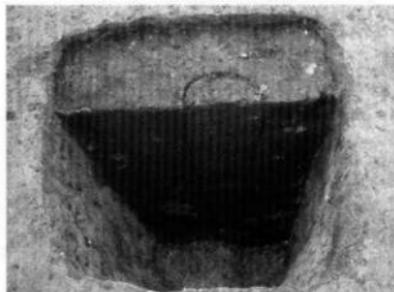
SB055 e (S-43・44) 完掘状況 (南西から)



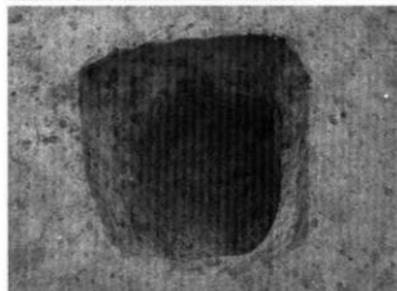
SB055 f (S-29) 土層観察 (南から)



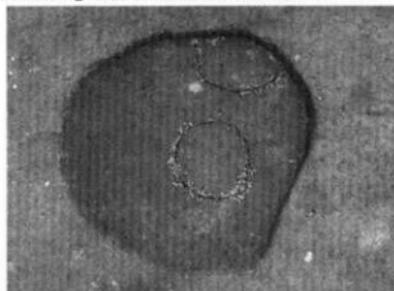
SB055 f (S-29) 完掘状況 (南から)



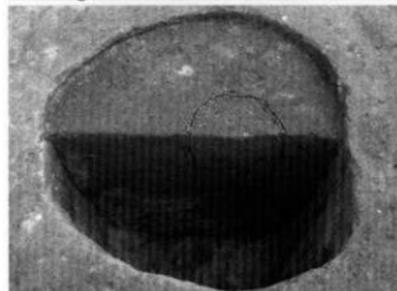
SB055 g (S-31) 土層観察 (南から)



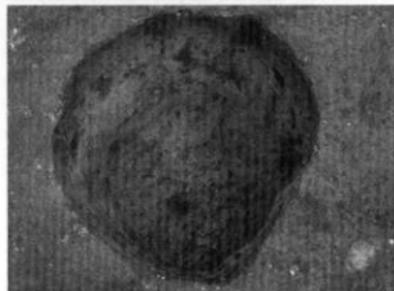
SB055 g (S-31) 完掘状況 (北から)



SB055 h (S-42) 検出状況 (西から)



SB055 h (S-42) 土層観察 (西から)



SB035 c (S-44) 土層観察 (南から)

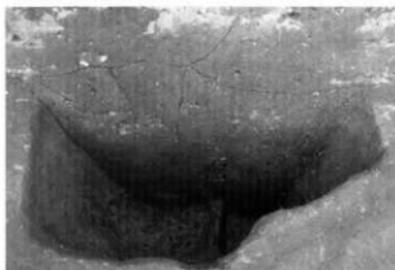


SB065 検出状況 (北東から)

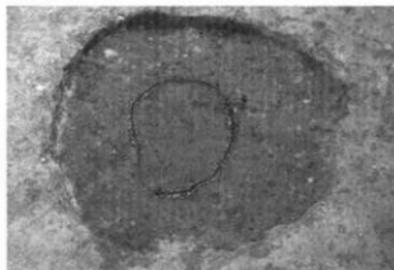


SB065 完掘状況 (北東から)

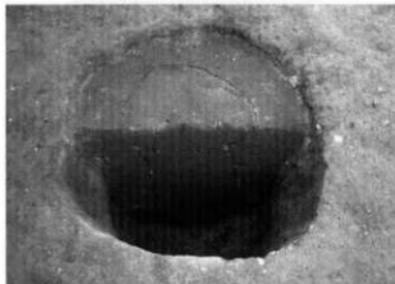
Pla.16



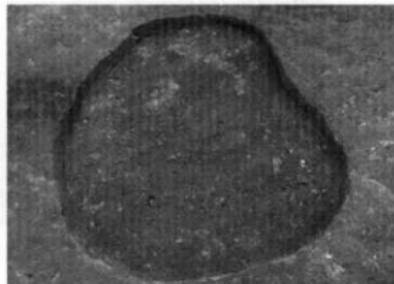
SB065 a (S-115) 土層観察 (南東から)



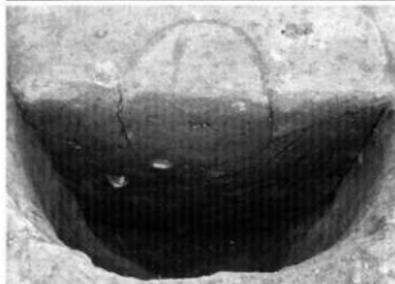
SB065 b (S-110) 検出状況 (南西から)



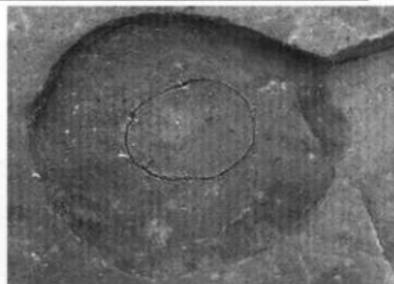
SB065 b (S-110) 土層観察 (南西から)



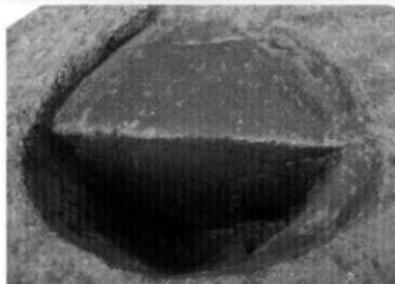
SB065 c (S-105) 検出状況 (北東から)



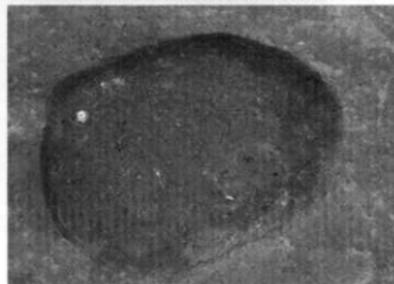
SB065 c (S-105) 土層観察 (南西から)



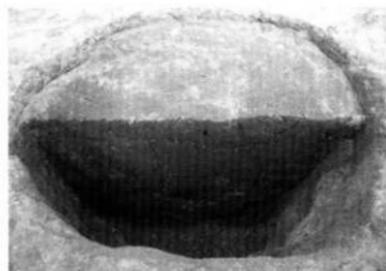
SB065 d (S-100) 検出状況 (北東から)



SB065 d (S-100) 土層観察 (北西から)



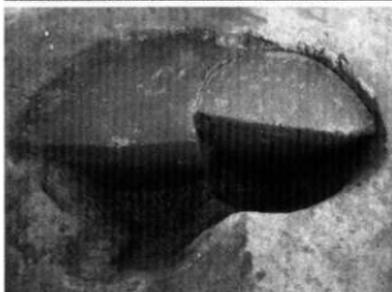
SB065 e (S-130) 検出状況 (北東から)



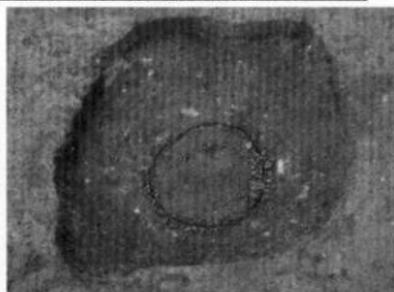
SB065 e (S-130) 土層観察 (南西から)



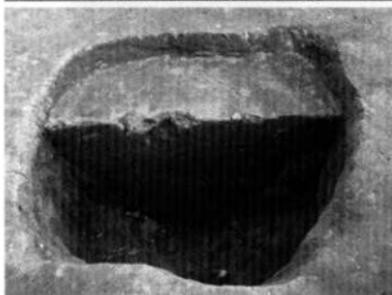
SB065 f (S-125) 検出状況 (北から)



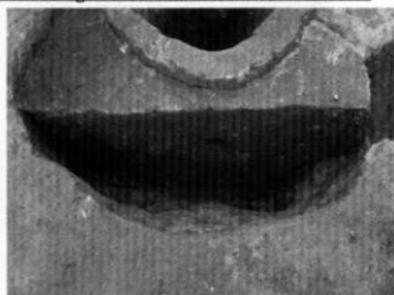
SB065 f (S-125) 土層観察 (南西から)



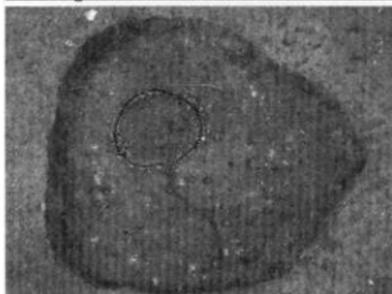
SB065 g (S-120) 検出状況 (南西から)



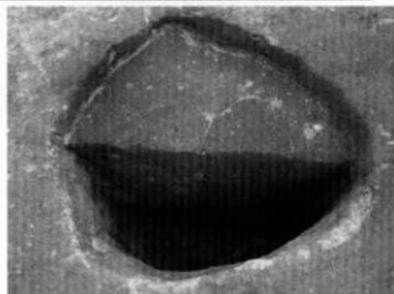
SB065 g (S-120) 土層観察 (南西から)



SB065 h (S-135) 土層観察 (南西から)

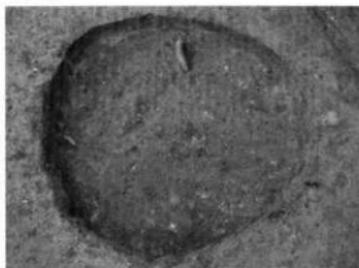


SB065 i (S-140) 検出状況 (北東から)

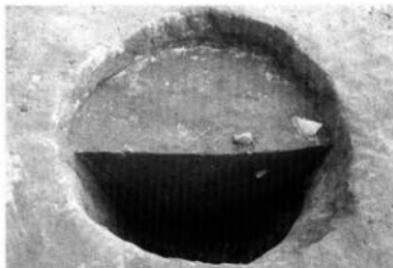


SB065 i (S-140) 検出状況 (西から)

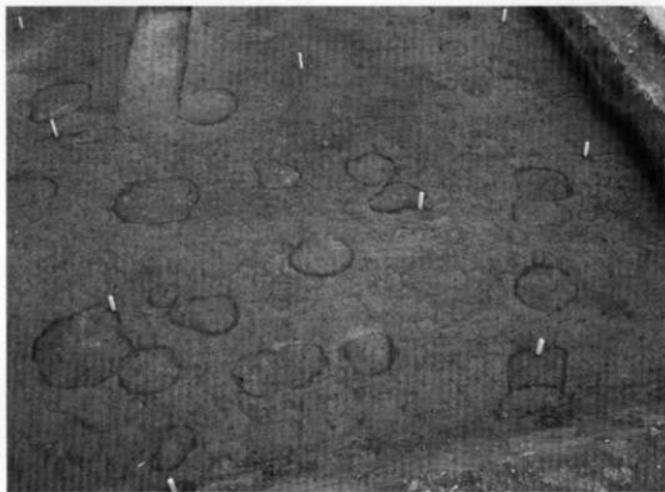
Pla.18



SB065 j (S-145) 検出状況 (北東から)



SB065 j (S-145) 検出状況 (南西から)



SB080・085・090 検出状況 (南西から)